
ヒツゼンセイ

八久斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒツゼンセイ

【Nコード】

N5215I

【作者名】

八久斗

【あらすじ】

丹木高校2年生、榎本諒太郎の、文芸部部长としての1年間の物語。

1・March（前書き）

この小説はデジタルノベル「ヒツゼンセイ」の元となった文章です。多少の改変を行っていますので、可能であればデジタルノベル版をプレイすることをお薦めします。

1・March

「合格、おめでとっ」

「……ありがとうございます」

俺の祝辞に対し、彼女は些かの表情の変化も見せず、そう静かに呟くだけだった。

「よく頑張ったな」

「先輩のお陰です」

「俺は何もしてないさ」

「いえ、先輩が勉強を教えてくれたから、合格したんです」

そう言われると照れると同時にどこか後ろめたい。下心が無かつたかと言われれば、答えは否だ。まあ、お世辞半分に聞いておこう。事実、彼女がここ丹木高校に合格したのは、彼女自身の努力の賜物なのだから。

辺りを見渡せば、いや見渡すまでもなく、俺たちと同じ年代の人、人。ほんの2分前はこの玄関脇で固唾を吞んで掲示板の運ばれてくるのを見守っていた受験者一同だが、今は十人十色の反応を見せている。大声で騒ぎ立てるもの、胸上げをするもの、うずくまり泣き出すもの、電話で誰かに報告しているもの、静かにその場を後にするもの……不幸にも落ちてしまった人にはこの先めげずに頑張ってもらいたい。

でもまあ、そんなことはぶっちゃけて言えば俺には関係の無いこととで。ただ1つ、彼女の合否を見るところのことだけが、ここにいる理由である。

さて、合格を確認した今、もうここに用は無い。だが、このまま帰るわけにはいかない。俺はかねてから考えていたことを実行に移さねばならない。しかしここでは周りの目が多いし、この場に留まるのも邪魔だろう。俺は提案する。

「近くにケーキの美味しい店があるんだが、行かないか？ お祝い

に奢るよ」

彼女はコクリと頷いた。続いて口を開く。

「その前に、入学手続きしないといけませんけどね」

そうだった。失念していた。

「あと、親と先生たちに合格を伝えておきます」

殊勝だ。去年の俺はそんなことやんなかったぞ。

昼飯を食べたばかりで大して減っていない腹に温かい紅茶を流し入れる。ガラスの向こうは、雪は溶けたとは言えまだ寒い。薄い手袋とマフラー装備だ。

視線を戻すと、彼女はショートケーキの最初の一切れを口に運んでいるところだった。

「……何ですか？」

もぐもぐと動く顎を眺める俺に対し、彼女は問う。

「いや、別に……美味しいのになって思っ」

「美味しいって言ったの、先輩じゃないですか」

「そんなのは俺の主観だからさ。他の人がどうかは分からないだろう？」

「そういうことなら、美味しいです、とっても」

「そりゃよかった」

それならもう少し美味しそうな顔をしてもらいたいものだが。

まあ、でも、だからこそ。

俺は彼女に惹かれたのだが。

「よく来るんですか？　ここ」

「そうちよくちよくってわけでもないけどな。たまに」

脇の紙袋を漁る彼女。先程貰った書類やら勧誘チラシやらである。

「18日にオリエンテーション……」

「ああ、その日に教科書とか買って宿題出されるから」

「宿題、ですか」

「春休みの宿題。舐めてかからない方がいいぞ？　中学とは比べ物

にならないボリウムだからな」

「肝に銘じます」

「……まともに受け取ってないだろ」

「そんなことないです」

素っ気無い。相変わらず。何かこう、テンションが上がったりするようなことが、この子には無いのだろうか。

「楽しみか？ 高校生活」

「そうですね。楽しみでもあるし、不安でもあります」

「ま、大丈夫さ。何かあったら俺に聞けばいい」

「分かりました。これからよろしくお願いします」

そう言って深々と頭を下げる。

「……これで、先輩が本当に『先輩』になるんですね」

「そういうことだな。ようこそ、丹木高校へ」

俺の笑みは半分ぎこちないものになっていたかもしれない。心の中でもう1人の俺がけしかける。早く切り出せと。

心拍数が上がっていく。俺は1つ深呼吸をして、両の拳に力を込めた。

俺と彼女が出会ったのは、1年半ほど前、とある塾の夏期講習の時だった。何故中学が異なりしかも学年1つ下の彼女と俺に接点があったのか。何のことは無い、俺の数学と英語の出来が悪かったというだけの話である。2年の授業を受け直さなければならぬほどに。まあ、他の科目は平均以上にできたから、運よく今は県内随一の進学校に在籍しているが。

ある日の朝、訪れた教室はがらんとしていた。前の方に女子が1人ポツリと座っているだけ。はて教室を間違えたかなと思った。ファイルを取り出して確認するが、場所は合っている。時計を見ると授業開始30分前だった。確かに早いがもう少し人がいてもよさそうなものではないか。そう思った俺は、そこに座っていた女子に尋ねることにした。それが彼女だった。

声をかけてはつとした。すらりとした体躯。ピンと伸びた背筋。

肩にかかるくらいの艶のある黒髪。白く透き通った肌。シャープな輪郭。凜とした表情。力を帯びた両目。知的な印象を受けると共に、格好良いと思った。女性に対しても格好良いという言葉を使うのかと、当時の俺はしきりに感心したものである。俺の問いに答えるのもまた、落ち着きの中に静かな響きのある、綺麗な声だった。

後で分かったことだが、その日の前日の深夜にオリンピックだか何だかの中継放送があり、多くの生徒はそれを見ていたために教室に来るのが遅れたという。そうでなくても夏期講習の1限が始まる30分も前に来る奴なんてのは珍しい。そんなわけで偶然2人きりとなった俺と彼女は知り合うことになった。俺は彼女の隣に座るようになった。時々声をかけるようにもなった。彼女は今と変わらず表情1つ変えなかったが、嫌がっている素振りもなかったので俺は話しかけ続けた。

その半年後、俺は何とか第1志望の丹木高校に合格することができた。それでも俺はその塾に通うことをやめなかった。塾に入るまではそれほど成績が芳しくなかった俺は、広告塔として重宝された。こんなに成績が悪かったのに塾のお陰で県内トップの高校に進学できました！ そんなコピーと共にチラシに載せられたりもした。アルバイトとして俺と同じ高校を志望する後輩の相談に乗ったり、質問に答えたりした。個別に勉強を指導することもあった。その中に彼女がいた。

そして今、彼女は俺と同じく、県内随一の進学校にして私立校、丹木高校に入学を果たしたのである。年が明けてもそれほど勉強している素振りがなかったたので心配だったが、何のことは無い、彼女はできる子だったというだけの話である。むしろ俺が受かったことが不思議だ。以前にどこかで、女性は男より頭の切り替えができるという話を聞いた。受験生同士で付き合って、男が落ちて女が受かるなんてことは間々あるらしい。男って駄目な生物だな。とは言え、俺が今丹木高校生であるのはここを受験したからで、その理由に彼

女にいいところを見せたかったというのが無いわけでもなかった。
男の見栄というのもそう捨てたもんじゃない。

「……どうしたんですか？」

彼女の言葉で現実引き戻された。いかん、現実逃避をしていた。
まるで衝撃的な記憶を脳が精神の均衡を保つために消去するかのよう
に、これから行おうとする考えを消し去っていた。だってほら、
嫌じゃないか。勇気がいるじゃないか。緊張するじゃないか。

辺りを確認する。客は結構いるが、そのほうがかえって声が目立
たなくていい。そして彼らは、それぞれのおしゃべりに夢中のよう
だ。俺が何か言ったところで、気にすることもないだろう。よほど
大きなとか、上ずった声でない限り。

いや、まあ、そうなる可能性もあるのだが。今の俺は大分落ち着
きを失っている。

平静を取り戻せ。もう一度深呼吸をしろ。

椅子に深く腰掛け直す。彼女を見据える。腹に力を込める。

そう。

俺は、今、ここで、彼女に告白する。

決めていたのだ。前からずっと。

俺が合格したときに、告白しようと思った。でも、今年は彼女が
大事な時期だからとか何とか理由をつけて逃げていた。今回はもう
その手は食わない。今言うべきなんだ。今言わなくちゃいけないん
だ。そうじゃないと、この先ずっと無理だろう。俺は一生後悔する。

「百合花さん」

「はい」

言え。言っんだ俺。勇気を出せ！

「……俺は、百合花さんが好きだ」

「はい」

「だから……付き合ってくれ！」

「はい」

……

……

……

……ん？

あれ？

何か……おかしくないか？

いや確かに。確かにね。自信はあったよ。俺は我ながら好青年であると思っているし、見た目も並以上ではあるという自負もあった。何より学年も学校も違うのに彼女と1年以上接している。それは彼女が俺を受け入れてくれているからだと考えてはいた。

でもさ、こういうのってさ、漫画とか小説とかだと、女の子は顔を真っ赤にして、俯いて、もじもじして、しばしの沈黙の後、絞り出すような声で「……はい！」なんて言つて、「……嬉しい」とか言いながら顔を上げて、そこには微かに涙が光つてたりして、男は天にも昇る心地になって、お互いに抱き合つて、恋が成就した喜びを噛みしめ合う、そんなんじゃないのか？

なんか、すごい事務的だったんですけど。

彼女の様子を窺う。いつもと変わらない。頬が若干上気して……ないか？ 嫌な顔もせず、泣きもせず、笑いもしない。

「よろしく願います」

彼女はそう言つて頭を下げた。

あれー？

「そんなんでいいのかよ！」と俺は心の中で突っ込んだ。

多少の自信と不安と覚悟を以つて臨んだ俺の告白は、こうして無事に受け入れられた。

……そうだよな？

その後、ショッピングモールを歩き、彼女にお薦めの本を紹介し、暗くなつたので家に帰った。ベッドにゴロリと横たわる。

確かに拍子抜けのする告白ではあった。でも、それでも、付き合

うことになったのだ。彼女は、正真正銘、俺の「彼女」になったのだ。漸く、ジワジワと喜びが込み上げてくる。

途端に携帯が鳴った。

カズからのメールだった。背景は7色で派手にデコレーションしてある。

「カップル誕生おめでとう！ これで日がな一日イチャイチャ（ハートマーク）できるね！ よっ、憎いねッ！」

文末にはショートケーキの絵文字。

「……」

携帯の画面に、思いつきり顔をしかめる俺が映っていた。

気持ち悪い。何かすごく気持ち悪いぞ。何でカズが知っているんだ？ あの時店内にカズはいなかったはずだ。彼女がカズに教えたというのも無いだろう。彼女とカズが連絡を取り合うほどの仲だという認識は俺の中には無い。だったらどうやってカズは俺が彼女に告白したことを知っている？ ストーカーか？ ストーカーなのか？ あいつはストーカーだったのか？ これは通報するべきか？ …… などと下らない思考をしながら天井をぼんやりと眺めた。2

分ほどで飽きた。

まあ、偶然外出先でデートしている俺たちを目撃したんだろう。そういうことにしておこう。

悪友を警察に引き渡すつもりも無いしな。

そもそも、面倒臭いし。

カズもまた、塾で出会った人間だった。中学は違ったが、俺と一緒に丹木高校に入学した。

コイツもまた、相当な変人だった。「悪友」という言葉はコイツのためにあるんじゃないかと思ってしまうような人間だ。なんとも人の心を読むのが上手いやツで、俺が彼女に気があることもすぐに看破されたし、他にも……いや、思い出すのはやめておこう。せっかくの上機嫌に水を差すべきではない。さっきのメールも忘れよう。

今のテンションでテスト勉強を片付けるべきだと判断した俺は、机に向かった。学年末テストが近い。苦手な英語を広げる。仮定法過去完了……強調構文……関係副詞……面倒臭いな、面倒臭い。気楽にやれる国語を先に片付けた方がいいかもしれないな。鮑を漁る。教科書とノートを取り出す。ざっと眺める。

テストが終わったら春休みだ。だがそれほど嬉しくもない。春休みは1週間ほどしかない。短すぎる。それに対して宿題は山のように出る。彼女に言った言葉は決して脅しではない。労働基準法違反ではないかと思う。生徒も教師も。

そして春休みが終わったら新入生のご登場だ。期待と不安を抱えているのは何も彼らだけではない。クラス替えがあるし、各種委員も新しく選ぶし、担任も時間割も変わるし。彼らほどではなくとも俺たちの生活もガラリと変わる。寝ぼけて旧教室に向かわないよう気をつけなくては。部活紹介の内容もまだ決めてないし……気が滅入るな。

そう、部活だ。テストより宿題より、俺にはこれが一番重くのしかかっている。

如何に文芸部の存在を新1年生らにアピールするか。去年の部長のように、奇抜なパフォーマンスで観客の目を引くか。それとも無難に活動内容を紹介して終わるか。

普通に部員を集めたいのなら、後者にすべきだと思う。変なことをすると色物が集まる気がする。それに、俺はアグレッシブなのは苦手だ。というより、できない。かと言って適当に済ますわけにもいかない。3年生が消えて文芸部は今閑古鳥が鳴いている状態だ。広い教室に少ない部員。この不均衡状態を是正するためにも、新入部員は集めなくてはならない。部室を変えるのは面倒だからな。

明日辺り、話し合いの場を設けてみるべきか。そう思い立ち、明日の6限のノートにメモする。

そつえば今日の合格発表の場でチラシを配っている部活がいく

つかあったが、不合格者の心境を考えて、また寒い中動かねばならない部員の負担を考えて、文芸部はやらないことにした。俺と彼女が2人でいる姿を部員に見られなくなかったというのもあるが。権力濫用だな。

とにかく、新入部員の確保だ。テストとか別にどうでもいい。彼女が入ってきてくれたら……とか考えるのは、俺が男だからなのだろうか。彼女は露ほどもそんなこと思っていないかもしれない。

……そうか。そういえば部活紹介を彼女も見ることになるのか。

ああ、絶対無理だ。無難に行こう。部長権限発動。はい決定。異論は認めない。

めでたく方針が決まったので、ゲームをすることにする。テスト勉強？ そんなもんあったか？

夕飯のお呼びがかかったので、セーブをして電源を切る。

リビングに着くと、俺の席に俺宛ての手紙が置いてあった。塾の勧誘だ。俺が依然居た所とは別の。

年度の変わり目は不安になるものだ。加えて新しいことを始めようという気になる。それにつけこむ——などと言うと語弊があるが——この類のダイレクトメールが、この時期には後を絶たない。封を切ると、有名大学へ入った人数が大きく印刷されている紙が目に入った。このうちの何パーセントがここに行ったおかげで合格したのか、聞いてみたいものだ。別にこういうものを否定するわけじゃないが。俺が彼女に出会えたのはそういうわけだし、俺が丹木高校に受かったのも御陰様だしな。

と、そこで、俺は先程の疑問に対するそれらしい答えをふと思いついた。

何故カズは俺が彼女に告白したことを知りえたのか。

カズは俺が彼女を好きだということは知っていた。なら、合格を機に告白するだろうということは予測がついたかもしれない。そし

て、彼女も俺のことを悪く思っていないということを知っていたのなら、俺たちが今日付き合い始めるということも推論可能なのではないか。

これには1つの穴がある。彼女の合否をどうやって知ることができたのかという点だ。彼女が仮に不合格だったら、その気まずい雰囲気の中で俺は告白できただろうか。自信が無い。それはカズも分かっているはずだ。だったら、カズは彼女が合格したという確信を得る必要がある。しかし、これも方法はある。

彼女は合格を「先生」に報告すると言っていた。その「先生」には恐らく塾の先生も含まれるだろう。向こうは仕事柄、有名校の合格実績を得たがる。そしてそれを公表したがる。カズは1年前までその塾にいたわけだから、顔見知りの先生も多いはずだ。彼女が合格したかどうか、訊けば教えてもらえるだろう。彼女と俺とカズのつながりを知っていれば尚更。

ついでに、俺たちが食べたショートケーキの絵文字が使われていたのも偶然だろう。ケーキの絵文字は祝うときに使うものだと思う。そしてショートケーキ以外のケーキの絵文字を俺は見たことが無い。俺たちが食べたのがショートケーキだろうが苺タルトだろうがトロピカルパフェだろうが栗きんとんだろうが、メールの内容は変わらなかっただろう。

そんなもんだ。多分な。

2・April

「榎本諒太郎です。文芸部の部長をやってます。趣味は何の捻りも無く読書です。あんまり有名じゃないけど面白い作品があったら是非教えてください。よろしくお願いします」

そんな無難な自己紹介を終えて席に着く。

始業式が終わり、新たなクラスになり、最初のホームルーム。

自己紹介とは、やらないと困るけどやると非常に面倒な作業の最たるものだと思ふ。新たな学校にやってきたフレッシュメンが緊張するは勿論だが、単なるクラス替えのときはまた違った問題がある。何せ、知っている顔が多いのだ。なのに自分について語らなくてはならない。赤の他人ならいざ知らず、旧知の友人に対して自らの名を述べる。何とわざとらしいことか。

これが転校生がやってきたときのような、1人以外全員知り合いのような、偏った比率なら全く以って平気だ。だが、玉石混交というか、色んな間柄の人がごちゃ混ぜの状態では、誰を対象にして話せばよいのやら見当がつかない。来年のクラス替えのときはまた割合は変わっているわけで、これに慣れることは生涯無いだろう。

さて、と俺は教室を見渡す。自己紹介は名簿順、「え」の俺はすぐさま立つ羽目になり、後はぼんやりと眺めていればいい。多くのクラスメートの話を落ち着いて聞ける反面、前例が少なくスタンダードな話の流れを掴みにくい。考えてみれば、生まれた時点でこうなることはほぼ確定しているわけで。これは格差ではなからうか、などと屁理屈をこねるつもりも無いが。ただ、名簿番号1番と最後は過酷な状況だと思う。さながら赤道直下と南北端のように。それだけで肝が据わる気がする。

2年5組。これが新しい俺の所属団体。ちなみに文系クラス。去年の冬、文理選択のオリエンテーションで先生の仰っていた「数学が苦手な人にとって理系は修羅の道だから絶対にやめておけ」とい

う忠告に素直に従った結果である。

最も仲の良かった竹内とは、ここで袂を分かつことになった。一応付記しておくが絶交したわけではない。竹内がラーメン派で俺がうどん派であるなどという理由では断じてない。

共通項が全く見出せないにも拘らず妙に気が合った彼は、数学2科目の点数が他の4教科6科目の合計点とほぼ等しいという変人だった。先の先生は「数学のできる文系は有利だ」とも仰っていたが、彼には絶対に当てはまらない。俺の我侭で彼の将来の芽を摘むのはあまりに惜しいということで、俺たちは泣く泣く道を違えた。

……いや、別に会おうと思えばすぐ会えるんだが。仮に文系に来たところで同じクラスになるとは限らないし。

と、そんな感じで思考を巡らしている内にいつの間にか自己紹介は終わり、俺は毎度の如く名簿番号が早いことの利点を半分ほど失ってしまうのだった。

今年度初めての記念すべきホームルームが終了し、学級委員長を初めとした全ての役職を運良く逃れた俺は、その戦績に満足し安堵の溜息を吐いた。

昼休みが終われば入学式、続いて新入生歓迎会が行われる。勿論そこには部活動紹介も含まれるわけで、その準備をしに俺は部室に向かった。

特別棟の隅の一角にある社会科講義室。その立派な名前とは裏腹に、この教室が使われることはあまり無い。週に4回ほど3年の文系クラスに使われるだけで、即ち俺たち文芸部が使っている時間の方がずっと長い。部屋の後ろに並ぶ本棚がそれを物語っている。扉を開けると既に一人、パンを頬張っている姿が認められた。

「うおっす！ 早いな、榎本」

「そりゃあこっちの台詞ですよ。購買のパンじゃないんですか、それ」

重ねて言うがこの部屋は校舎の隅っこに位置し、パンの売り場は

勿論、普段学生が使うスペースから悉く離れている。放課後30分
ほどもすれば、生物部や美術部など同じように特別教室を使う部員
がちらほら姿を見せるようにはなるが。

「あれ、言ってなかったか？ 俺の家の近くに、閉店間際になると
特売をやるパン屋があつてな、いつもそこで買ってるんだよ」

「そうでしたっけ」

「先代部長の昼飯くらい把握しとけ！」

「すみません、って、先輩は先々代の部長の昼飯知ってるんですか
？」

「んなもんもう忘れた！」

「ですよー」

「ちなみに俺の好きなのはイチゴミルクパンだからな！」

「……それも憶えるんですか」

「当然だ！」

「……ところで、紹介する本は決めました？」

「おう、そうだそうだ」

先代部長こと入船先輩は傍らの鞆をひっくり返す。バサバサとそ
の手の本が机の上に積みあがる。これが今日だから教科書はどうし
たという突っ込みも入らないが、授業が始まってこれだから困り
者である。俺は困らないが。

文芸部の紹介は無難なものに決定した。だがただ活動内容を読み
上げるだけではつまらない。つまらないと無難は違う。ということ
で、活動について簡単に触れた後、部員5人からそれぞれお気に入り
の本を30秒ほどで手短に紹介してもらうことにした。幸いにも
好みのジャンルは皆バラバラだ。恋愛、ホームドラマ、ホラー、S
F、ファンタジー等等。守備範囲の広さを見せればハードルも下が
るだろう。

「はい、これでどうだ？」

そう言って手渡されたのは1冊のライトノベル。ライトノベルの
定義が何なのか実はよく知らないが、表紙はそういう系の絵で飾ら

れている。貶すつもりは無いが、よくこれを堂々と薦められるものだと思う。

「どういう話ですか？」

「家族のドタバタものだ」

「なるほど、いいですね。……全年齢ですよね？」

「当たり前だろう！」

「際どい表現とか無いですか？」

「信用しろよ！」

念を押すのには一応理由がある。こう言うと失礼な気がするが、先輩はオタクである。しかし先輩曰く、人をオタク呼ばわりすることを失礼だと思ふこと自体が失礼らしい。俺はオタクという言葉が既に世間一般で侮蔑語と認識されかかっている以上、別の言葉を探した方がいいと思うのだが、そこは価値観の相違というヤツだろう。去年の文芸部の紹介は先輩の独壇場だった。制限時間を目一杯使ってライトノベルの成り立ちを語る姿に周囲はドン引きだった。俺自身も入部を躊躇った。同様の理由で考えを改めた同級生が何人かいるのではないかと思わずにはいられない。

結局、入ったのは俺を含めて4人だった。そのうち2人は今ではほとんど来ない。今の3年が8人であることを考えると酷くアンバランスだ。しかし地味な紹介をして1人も部員が入らなかった所だつてあるし、残る1人がその演説に感化されて入ったことを考えると、強ち悪いとも言えないのだが……

「せんっぱいっ！ おっはようございまーっす！」

扉を開く音と共に力の抜ける声が届く。噂をすれば影、御本人様の登場だ。後ろからは先輩方がそろそろと入ってくる。

「おう、お早う。相変わらず元気だな」

「榎本君もお早うっ！」

「今が昼だという突っ込みは敢えて入れないでおく」

「突っ込んでるじゃんー！」

鼻の奥がよほど細いのかと思われる声を上げながら回し蹴り。俺

は動かずしてそれをかわし、彼女は机を巻き込んで派手な音を立てながら床に体当たりを食らわす。今日も賑やかだ。

「仲本さんは本持つて来た？」

「ちよつとー、大丈夫？くらい言いなさいよー！」

「大丈夫？」

「へーきへーき！ この通りぴんぴんしてるよっ！」

捻れた体勢のままでそんなことを言われても説得力が無いという
という突っ込みは入れないでおいた。

しかして入学式は終わった。新入生歓迎会も終わった。部活動紹介も終わった。終わったのである。無事にかどうかはさておき。

再び部室に向かう俺。しかし扉に手をかけると、今度は先客が多いらしい、複数人の声が聞こえてくる。これが入部希望者だったりすると大喜びなのだが、そんなはずは無い。1年生はホームルーム中なのだ。

「痛い！ やめるんだお前ら！ 俺に何の恨みがあつてこんなことを！」

「いくらでもあるわ！ 何また勝手なことをしてくさつてんだ！」

入船先輩の悲鳴と、また別の先輩の怒声が響く。

「うわあ、やめろ！ 蹴るんじゃない！ お前らはサディストか！」

俺はマズじゃないから需給は成り立たないぞ！」

「うるせえ。じゃあ殴る」

「殴るのも禁止！ 痛いって言ってるだろ！ お前らは揚げ足を取る子どもか！」

「じゃあ刺す」

「刺す！？ 刺すって何！？ 怖いよ！」

扉を開けると、先程の声の主、森田先輩が俺の方を向いて笑った。

「部長、一緒にコイツボコリましようよ」

勿論冗談半分である。だが重要なのは、もう半分は本気だということだ。

紹介は順調だった。5人目の入船先輩にマイクが渡るまでは。

先輩は時間を前4人の3倍は費やし、まだ続くようだったので俺がマイクを奪って強制終了させた。図らずも笑いが取れたという点では良かったが、またもや文芸部に変なイメージが付いてしまった感否めない。

それにしても去年の先輩方はどうして入船先輩に部活動紹介を任せてしまったのだろうか。俺も人のことは言えないが。

「なんてことだ！ 最早この国に言論の自由は認められないのか！ 神は死んだ！」

「ウチの親が、自由を振りかざす人間に碌な奴はいないって言うたが、たった今それが身に染みた。大体入船 teme この野郎、去年の失敗を繰り返す気か」

「失敗などしていない！ 仲本は有望だ！ 同志に出会えて俺は嬉しいぞ！」

「私も嬉しいですよー！ 顔はタイプじゃないですけど」

「今何か酷いこと言われた気がする！」

「仲本、ちよつと黙っててくれ。話がこんがらがる」

いつもの風景ではあるが、室内の空気が僅かに冷えたのを俺は見逃さなかった。

前に述べた通り、今の2年は非常に少ない。そしてこの社会科講義室はやけに広い。丹木高校のスペースも余裕があるわけじゃないいくつかの部活が共用している所もある。にも拘らず文芸部がこの部屋を独占できているのは、それなりの人数がいたからであって。元3年生が卒業して部活を去り、現3年生ももうすぐ引退の身であることを鑑みれば、部室維持の為に新生の大量確保が不可欠なのだ。

俺が部長を引き継いだ時、入船先輩は言った。「部室を移すかどうかの判断はお前に任せる」と。俺は現状維持を選んだ。引越しが面倒なのは勿論、たった1年とは言え過ごしたこの部屋を明け渡すのは寂しい気がしたのだ。しかしそれはつまり、1年をたくさん入

れると宣言していることに他ならない。そうでなければ俺は今度の生徒総会で非難の矢面に立つことになるだろう。生徒諸君がそういった事情に熱心であれば、の話だが。

とは言っても、裏を返せば俺が謝って来年の部室を縮小すれば済むということでもある。だが心優しい先輩方はそれを是としないのだ。

「まあ、何人来るかは来てみないと分かりませんよ」

「とは言っても待つだけじゃあ心配だしな……そうだ、去年の文化祭で売れ残った文集、1冊ずつ1年の教室に配るとか」

「あ、それいいかも。先生に相談してみるね」

トトト、と駆けて行く先輩が1人。騒ぎが一段落する。

「……じゃあ桜井先輩が戻ったら、読書会の本の選定でもしますかね」

部長としてそう話を進める。俺の推薦図書は部活動紹介のときに挙げたものだったが、今度は時間制限も無くじっくり伝えられる。俺はその本を取り出し、パラパラとめくって、脳内で紹介文の推敲を始めた。

「生徒会に入ることになりました」

彼女は校門を出たところでそう言った。

来月の課題図書が決まり、各々が読書や雑談に興じているところに、彼女は現れた。入部希望者かと色めき立つ先輩方。だが残念、彼女の用事は俺だった。実に気まずい。

冷やかしやら嫉妬やらその他諸々の感情を背中に浴びながら——というのは俺の思い込みかもしれないが——俺は彼女と帰宅することにした。彼女の横顔を盗み見たが、案の定顔色1つ変わっていないかった。

「生徒会か。確かに百合花さんらしいっちゃあらしいね。それにしても早い決断だ」

「前々から考えていたんです。……文芸部も面白そうでしたけど」

「……アレを文芸部のいつもの姿だと思わないでくれ……」

「違うんですか？」

「……否定はできないけど」

「そうですか」

2人並んでの下校。うん、いいものだ。こうして毎日一緒に登下校できるなら、それは幸せと呼ぶ他無いだろう。生徒会のシフトがどうなっているのかは知らないが。

「……お弁当とか、作った方がいいですか？」

「は？」

「昼食です。私はどちらでも構わないんですけど」

「い、いやいや！ 是非お願いします！」

「承りました。明日から作ってきます」

……なんとも事務的である。表情も変わらない。

ただ、心なしか、声が弾んでいるような気がした。思い過ごしかもしれないが。でもほら、男っていうのはそういうものなんだ。多分。

別れ際に彼女の髪に光るものを見つけたことも付け加えておく。

この前一緒に水族館に行ったときに買ってあげたものだ。

羨むがいい。妬むがいい。

3・May

「おーっす」

いつもの如く、社会科講義室に入る。

「うつす」

「よお」

「こんにちは」

「こんにちはわー」

「おはようっ！」

「遅いぞ、部長」

「やつぽー」

次々と挨拶が返ってくる。

最近はみんな張り切っているのか、やけに早い。俺がここに来ると、来る奴は大抵既に揃っている。まあ当然かもしれない。新メンバーもいることだし。

ウチは体育会系じゃないし、活動は自由だ。文化祭の文集作成以外に参加義務は無い。気の早い先輩なんかはもう受験勉強を始めていたりして、段々と部室に顔を出さなくなる。今が一番賑やかな時期なのだ。

俺は改めてその顔ぶれを見渡す。特に1年生、新入部員を。

まずは既に上級生と打ち解け、楽しそうに話している榊。名前は野乃。明るくて礼儀正しく、人見知りもしない。その上容姿も人形のように、入船先輩曰く「理想の後輩」だそうである。俺の印象では仲本に近いかもしれないが、嗜好が至って普通であるという点が決定的に異なる。部活動紹介の翌々日にひょこりと現れ、新入部員第1号になった。歓迎会で興味を持ったとのこと。実に嬉しい。先週自己紹介で好きな本を言ってもらったが、榊が挙げたのは有名どころの恋愛小説だった。恋愛ものといえば桜井先輩で、現在進行形で薦めの本を紹介されている。

次に馬越信之介。こちらでも先輩方と談笑中。適応能力は高いようだ。軽そうなイメージの男子生徒で、制服も着崩し、髪も明らかにワックスで固めている。本を読むよりサッカーが何かをやっている。若しくはバンドとか。好きな本はと訊かれ挙げたのは国民的名作だった。しかしそれは漫画である。

「えっと、じゃあアレっすね。推理小説とか」

口から出たのはそれもまた有名なタイトル。入った理由は「何か面白そうだったから」。入船先輩のアレだろうか。

そして入部して間もないのに早くも本棚に自分のスペースを作り始めている尾崎栄一郎。はきはきと話し人当たりもいいが、どこことなく暗い印象を与える。実は教頭の苗字も尾崎で、実際彼はその息子である。前々から教頭の子どもが入学してくるといふ噂は俺たちの間で広がっており、歓迎会で挨拶した新入生代表を差し置いて一番の有名人となっていた。まあ、とは言ったところであくまで一般人、タレントやアイドルのように話題に上ることはそうそう無いが。彼は教室に配布した文集を見て文芸部に入ることにしたらしい。

思いつきでやったことも意外と効果はあるもんだ。好みはファンタジー小説だそうで、そのタイトルは知らないものだった。しかし内容を聞いてみると面白そうだったので、読みたいと言ったら翌日持つてきてくれた。それが予想以上の傑作で、休み時間も授業中も構わず読み耽ってしまった。尾崎にそれを伝えると大層喜んでくれ、以降部室に色々な本を持ち込むようになった。元々部室にある本は部員が持ち込んだり卒業した先輩が置いていたりしたものなので、尾崎の本が本棚の一角を占めるようになるのもそうおかしいことではなかった。

……以上3名。これが、今年度の新入部員である。

そう、3名だ。

新たに入った人数は、俺たちの時よりも少なかった。

見学者は他にも数名いたが、結局入部届けを持つてくることはな

かった。もうカレンダーは5月。俺達は勿論、新入生も大分自分の場所を固めた頃である。これ以上の期待は出来まい。

最も多いはずの今の時期でも、この部屋の人口密度は高くない。今度の生徒総会では何か言われるだろうな、と軽く溜息をつく。まあいいさ。部室がどこに移ろうが、やることはさほど変わらない。むしろ、もっと教室に近いところになってくれた方がやりやすいかもしれないしな。少なくともこの時の俺は、そう思っていた。

「じゃあ、今年度の活動について話し合いたいと思います」

大体が揃ったところで招集をかけた。

「まずは文化祭に出す文集の作成。これは大きく執筆と編集に分かれます。動けるのが大体10人くらいですから……5人ずつとところでしょうか。やることは大体想像できると思いますが、執筆は文集に載せる小説を書きます。内容は相談して被らないようにしてください。文量は3000字以上。上限は特に設けません、常識の範囲内で。期限は夏休み明けまで。出来れば7月中にしてもらえると推敲も余裕を持って出来ますし、編集の人も楽です。期末テスト前の編集会議にプロットを持ってきてください。ここまでで質問はありますか？」

「執筆はパソコン？」

仲本が口を挟む。去年も参加していたのだから、忘れたのでなければ1年生への配慮だ。新参者がこういう場で声を出すのは難しいものがあるからな。そしてそれは俺への説明不足の指摘でもある。「印刷の時はデータ形式なので最終的には。手書きで原稿を完成させても構いません。後で打ち込むことになりますが。過去の例に執筆者が全くパソコンが使えなくて編集が肩代わりしたこともありま

すので、どうしても無理な場合は気軽に言ってください」
先輩方の中から微かに笑いが漏れる。当の本人は今年の春、有名大学へ旅立ってしまった。数学科らしい。パソコンを使いそうなものだが、大丈夫だろうか。

「そついや、詩とかショートショートは無しつてことー？」

「え？ あー」

考えたことがなかった。どうしよう、と先輩方を見る。

「面白そうだな。書けるならいいんじゃないか？」

「でも1人だけやけに短いと変じゃないか。仕事量も減るし」

「文量と労力が比例するわけでもないが、まあそうだな。じゃあ数で補う。800字を4本とか」

「それはそれでハードル高い気がしますけど」

「別に少なくてもいいんじゃないかな？ その分編集の方の仕事すれば」

「でもそうなると文集全体の文量がな……」

「逆に編集の人に短いのを書いてもらうとか」

「仕事の分担がワケ分かんなくなるぞそれ」

「予め分かてればどうにか出来ますよ、多分」

「そうだな。じゃあ前もって申告すれば可、ということにするか。それに応じて人数も調整するってことで」

「賛成」

「じゃあそれでいいと思う人は拍手をお願いします」

パチパチパチ。満場一致で可決。

見ると1年生3人はポカンとしている。そりやそうだ。去年の俺もそうだった。

「ところで仲本、そういう質問をするってことは掌編書きたいのか？」

「い、いやいや、ちょっと思っただけですつて。やだなー、もう」腕をブンブンと振る仲本。こういうことを言われるから余計質問しにくいんだよな。執筆に関しては特に。

「次に編集。こちらは色々と仕事に分かれます。部活の紹介を書く人が1人。印刷業者に発注するのが2人。集まった文章をまとめるのが2人。そんなところだと思います。それとこの中から編集長を一人決めてください。全体の把握と会議の進行役です。また、執筆

者一人に対して編集が1人ついてください。いわゆる担当です。進行状況の確認等を行います。編集会議は月1回、その他必要に応じて臨時で行います。と言っても普段のミーティングとあまり変わりませんけど。推敲はまず担当が執筆者と相談して直した後、書き上がったものから順に部員全員で行います。説明は以上です。質問はありますか？」

無し。こっそりホツとする。

「じゃあ、それぞれの仕事を決めたいと思います。まず執筆者。書きたい人いませんか？」

しーん。全員が様子見である。面倒くさい。

口を開いたのは入船先輩。

「まあ、榎本は書くとして」

「俺ですか！」

「部長だろ」

「……まあ、書きますけどね」

「俺も書こう。先代部長だしな」

「心強いです。あと3人、誰か」

いない。まあ役決めつてのはそういうもんだ。

3年生の中には書けと言われれば書ける人は数名いる。遠慮しているのだろう。ならばと、俺は新メンバーに顔を向けた。

「どうだ、1年生も1人くらいやってみないか。4カ月後だから、時間はたっぷりある」

応えるなら榎辺りだろうと思っていた。すんなり入部したのはそれなりのやる気があったのではないかと。しかし当の本人たちは目を伏せてもじもじしている。やはり難しいか。

まあ、1年が書かなきゃならないという規則は無い。来年でも別に構わない、そう言おうとした時。

「……じゃあ、俺やります」

手を上げたのは入部の一番遅かった尾崎だった。意外に思ったが、少し考えればそうでもないことに気づく。

榊と馬越は部活動紹介を見て入ってきた。その時俺たちは本の紹介をメインにしていた。対して文集はそのまま、俺たちが文章を書いていることを示す。尾崎がそれで興味を持ったのなら、当然こうなるだろう。

「そうか、じゃあよろしくな」

俺が笑いかけると、尾崎は「はい」と丁寧だが良く通る返事をしてきた。その顔がとても真面目で可笑しかった。初々しい。

残る執筆陣は3年生に任せることで決まった。編集長は仲本。榊と馬越は発注と編纂をそれぞれ3年が付いてやることになった。それぞれの担当者も決まり、早くも文化祭に向けて文芸部は始動した。

その後も話はもう少し続いたのだが、そこは殆ど説明に終始したので省いても問題無いだろう。

文芸部の日常活動は2週に一度の読書会及びその選定だ。

実は読書会そのものよりも選定の方が盛り上がる。各々自分の好きな本を紹介するのだが、それには個性が出て面白い。粗筋をつらつらと述べるもの、自分が如何に好きかを力説するもの、その本との出会いを語るもの。入船先輩なんか大抵本を机の上にバンと置いて「読め。いいから読め」と言うだけ。筆舌に尽くしがたいのか面倒なのか分からない。そして一通り紹介が終わった後で投票。勿論自分以外の本に。選ばれる条件として入手ルートがあるかどうかも大きく関係する。1ヶ月の猶予があるとは言え、1冊の本を10人で回し読みするのはキツイ。図書館で借りられるか、本屋で立ち読みできるか、文庫本ならネットや古本屋で買えばそれほどの出費にはならない。

その他は話し合うことがなければ各々本を読んだり談笑したりしている。

また、年度末には内輪向けの文集も作るし、各種コンクールにも各人の自由意思で参加している。これはまだ先のことなので予め伝えるだけ。

終わりの方になると1年生も緊張がほぐれてきたようで、時々手を挙げては質問をし、俺が答え、入船先輩が茶化し、森田先輩が殴るというパターンが成立していた。

「パターン化するなよ！俺の身にもなれ！痛いから！」

「突っ込んで欲しいんじゃないかったのか」

「それツツコミじゃないから！漫才コンビが見たら卒倒するわ！」
「ちよつと静かにしろよお前」

「だから殴るなつて！訴えるぞ！傷害罪だぞ！全治1週間の軽傷だぞ！禁錮1年執行猶予3年だぞ！」

「じゃあ俺もお前を青少年健全育成条例違反で訴えることにする。罰金20万な」

「俺が何をしたよ！」

「存在が後輩の心身に悪影響を及ぼす」

「これいじめだよね！？」

部活が終わると、俺は1年1組に向かった。後ろの扉は開いている。覗くと、彼女が独り、席に座っているのが見えた。

足音で気付いたのだろう、俺が声をかけるより先に立ち上がり、振り向く。帰り支度は出来上がっているようだった。

「悪いね、待たせて」

「いえ、学校でやれることはありませんし」

流石に彼女が部室に来るのは恥ずかしいので、部活終了後に俺が彼女の教室に迎えに行くことにした。この時刻なら殆ど人もいない。彼女は彼女で生徒会の仕事を真面目にこなしているらしいし、仕事が無いときは図書館で読書や勉強をしているという。

元々中学の校区が違っただけに、家はそれほど近くはなく、朝一緒に登校することは難しい。しかし高校から見れば帰る方向は同じだし、2人ともバス通学なので途中まで一緒に帰るようにはしている。昼休みには屋上で弁当……と行きたいところだが、生憎ウチの高校は屋上が封鎖されている。ということで場所を探した挙句、敷地

の裏手に小汚いがベンチがあつたのでそこで食べることにした。校舎からは倉庫が陰になってよく見えないのもポイントだ。当然屋根は無く、雨天中止である。その場合はラウンジで落ち合い、弁当を受け取って教室に戻る。あまり目立ちたくはないので、交わせる言葉は少ない。帰りにいくらでも話せるはずなのに、ほんの30分程がとても惜しく感じる。そんなわけで俺の嫌いな天気は晴れから雨に変わった。ちなみに好きな天気は曇り。これは揺るがない。

……うん、こうして見ると、青春してるなあ、俺。

歩きながら、今日の部活のことを話した。いつも賑やかですね、と相槌を打つ彼女だが、文集の話をするとう驚いたような顔をした。

「尾崎君が小説書くんですか」

「ああ、ちよつと圧力を感じさせてしまったかもしれないけど、な。でも俺は結構楽しみにしてるんだ」

「……そう、ですか……」

「……百合花さん、尾崎のこと知ってるのか？」

言葉通りの意味ではない。噂が広がるのは早いから、1年でも大抵の生徒は知っているはずだ。だが俺は、彼女の返事に、単なる教頭の息子以上のことを知っているように感じた。何か関わりがあるのだろうか。確かクラスは違ったはずだが。

彼女はきょんとして俺を見返す。

「言ってませんでしたっけ？ 彼、生徒会にいるんですよ」

「……へええ」

少し驚いた。が、そう不思議なことではないだろう。

更に話を聞くと、彼女と同時期に入ってきたという。彼女は入学してすぐに入ることにしたのだから、相当早いことになる。

「入学前から決めてたのかな」

「そうかもしれないですね」

「生徒会での尾崎はどんな感じ？」

「真面目に働いてますよ。とは言っても、まだそんなにやることは

無いんですけどね」

「そつか。……でも、結構忙しいよな、それって。両立できるかな。今年ウチ部員少ないからさ、辞められたりすると困るなあ」

軽口のつもりだった。しかし、彼女は眉をひそめる。

「……どうした？」

「……」

彼女は答えない。赤信号の交差点で立ち止まったところで、ゆつくりと口を開く。

「……あんまり、気を悪くしないで欲しいんですけど」

そう前置きをして、彼女は言った。

「彼は、本当に文芸部に入りたくて入ったんでしょか？」

「……え？」

「嫌々やっているわけではないと思います。今後辞めるだろうというわけでもないです。でも……」

言葉を詰まらせる彼女。俺は一番の不安を否定されながらも、得体の知れない不気味さを払拭できずにいた。

信号が青に変わった。バス停に着いて、並んで腰を下ろす。

「……尾崎君は、文集を読んで文芸部に興味を持ったんだって言うていたんですね？」

「ああ」

「でも、文集は入学して1週間後には既にありました。それから更に1ヶ月近く経ってから、何故入部したんでしょう」

「……別に不思議がるところじゃないだろう？ 最初は興味無かったけど、何かの拍子で読んだんだよ」

些細な事だった。だからこそ、俺は嫌な予感がした。

「……何か、知ってるのか？」

「……」

バスが来た。乗る直前に、彼女はポツリと呟いた。

「……ちよつと、変な噂を聞いたんです」

4・June

「ふざけてるんですか？」

俺の話を聞いた彼女は即座にそう言い放った。辛辣だな、と苦笑する。

「冗談なんかじゃない。本気だよ」

そう宣言する。彼女に、それ以上に、自分自身に対して。

決めたのだ。

社会科学講義室は明け渡さない。

1か月前、俺は彼女から尾崎に関する何とも胸糞の悪い噂を聞いた。入学早々、1年生の間で流れ始めたというのだ。

丹木高校は私立校であり、教員の異動がない。また、経営は現場の人間にほぼ任せられており、学校上層部の権力は普通の高校と比べると強い。そして尾崎の父親は此処の教頭である。

学校は尾崎のバックにある。だから、彼に刃向うとロクなことになる。内申が悪くなるか、あらぬことで呼び出しを食らうか、下手をすれば些細なことにケチをつけられて停学はたまた退学処分を受けるか。そういう話だった。

馬鹿馬鹿しいと思う。

その噂を立てた人間は、本当にそんなことが起こり得ると思っっているのだろうか。テレビの見過ぎか、漫画の読み過ぎか。小説の読み過ぎだとは思いたくないが。

権力が強いといっても、学校で起きたことはすべて上に報告される。隠そうとしたところで早々できるものではない。私立であり進学校である本校はブランドであり、それを汚すことを最も恐れる。だから、そんなことをするのは教頭自身の首を絞めることであり、そんなことが分らないような先生ではない。そもそも教頭は厳格な人間で通っている。あの人がそんな事をするとは、俺にはとても

思えない。

だから、これは、悪意。彼ら親子を陥れようとする、何者かの明確な意志。

彼女は言った。尾崎は何も文芸部に興味を持って入ったのではないかもしれない。部活の内容ではなく、部室の場所こそが、彼の求めていたものなのかもしれない。何度も言うが、文芸部の部室は社会科学講義室。これは校舎の隅に位置し、人も殆ど訪れない。つまり、彼にとってそこは避難所だったのだ。周囲の悪意から逃れられる唯一の場所を、彼はそこに見出したのだ。

悲しいとは思わなかった。悔しいとも思わなかった。理由はどうか、彼の入部は大いに嬉しいことだった。そして結果として、彼もまた文芸部を楽しんでくれている、と思う。

力になりたいと思った。でも、たった1ヶ月の付き合いの俺が口出しすることは、きっと彼のプライドを大きく傷つける。だったら、

「どうしてそこまでするんですか？」

彼女は問うた。

「後輩を助けるのが、先輩の義務だからな」

そう答えた。それ以上の理由があることを俺は自覚していたが、敢えて口には出さなかった。

彼女はしばし沈黙し、注意していなければ聞き逃すような声で呟いた。

「……どうして、私に言うんですか」

「……」

「黙っていてくれればよかったのに。心の中にしまっておいてくれればよかったのに。そうすれば、私は……」

「ごめんな。百合花さんを騙すような真似はしなくなかったからさ」

「……先輩は意地悪です」

「そうだな」

1ヵ月後には生徒総会がある。体育館に生徒全員が集まり、学校

活動に関する話し合いをするのだ。生徒総会は年2回、夏の議題は主に体育祭と文化祭の内容、そして各部活動の決算。そして、質問の権利は生徒全員に与えられる。疑問と意欲と度胸さえあれば、生徒会や部長らに意見を言うことができるのだ。今の部室に不満を持つている人がいれば、文芸部の現状に対して文句を言いたくもなるだろう。広い部屋を少ない人数で独占している、他の部活に回すべきではないのか、と。俺はそれを拒絶するつもりであることを彼女に伝えた。

彼女は運営側の人間だ。イレギュラーがあることが予め分かっているなら、伝えておくべきだ。だが、あまりにも早過ぎる。別に対策を練る必要も無い、心積もりをしておくだけなら、数日前で構わない。

俺はずるい。暗に頼んでいるのだ。力添えをしてくれと。

「別に何かしてくれと言ってるわけじゃない。知ることで支障が出るのなら悪かった、忘れてくれ」

言ってるわけじゃない、か。忘れてくれ、か。心にも無いことを。全く、自分が嫌になる。

彼女は俺をしばらく見つめていたが、やがて力無く頷いた。

「何でよりによってお前がここに来たんだよ」

1週間前の昼休み、部室の扉に手をかけた俺の耳に、それは飛び込んできた。

昼食を終えて教室に戻ろうとした俺は竹内にはったり出くわし、クラスが変わってから初めてマトモに話をした。すぐ近くにいるのに意外と機会が無いものだと笑うと、竹内は思い出したように本を紹介してくれと言いだしたのだ。何でまたと問うと、夏休みの宿題となる読書感想文を今のうちに仕上げるのだという答えが返ってきた。なんとも気の早い話である。

「この調子だと次に会えるのがいつか分からないからな。それに、夏休みが始まる前から課題が1つ片付いているというのはいい気分

じゃないか」

そんなことを真面目な顔で言う。んな馬鹿なと返したかったが、布教のチャンスでもあるし、御希望通りお薦めを貸すことにした。これで課題図書が指定されたらどうするつもりなんだろうな、コイツ。ともかく目当てのものは確か部室にあったと思い、その足で向かった先の出来事だった。

「お陰で俺も巻き添え食ってんだぞ？ 分かってんのか？」

再び声がする。こんなところで立ち聞きもどうかと思うし、状況は推測できた。思い切りドアをスライドさせる。

そこには、尾崎と馬越がいた。馬越はあからさまに驚いた様子で、尾崎はポカンとして俺を見る。

「……何やってんだ？」

言うべき言葉が思いつかなかったし、逆に怒鳴り散らしそうにもなったが、どうにか、それだけ言った。

「……別に。何でもないすよ」

明後日の方向を見ながら馬越が言う。尾崎は床を見つめたまま動かない。

「馬越、その態度は感心しないな」

「……先輩には関係の無いことです」

「本当にか？ 部活の話をしていたように聞こえたが」

「……」

「人の所属に文句をつける筋合いは無いと思うぞ」

「そんな、被害者は俺ですよ？ 人の生活を邪魔する権利なんて、誰にも無いはずだ」

「そつだ、誰にも無い。お前にもな」

「どうしてですか？ 俺はただ楽しく部活をしたいだけです。なのにコイツが——」

「うるせえよ」

突然馬越の後ろで尾崎が呟いた。とても静かで、それでも馬越を黙らせるには十分だった。馬越は口をパクパクさせていたが、チツ

と舌打ちをすると、

「……失礼します」

そう言うなり俺の傍らをつかつかと通り過ぎていく。ドアを大きな音を立てて閉め、その姿は見えなくなった。とんだ有言実行だ。

「……先輩」

「……大丈夫だ」

俺の顔を覗きこんでくる尾崎に咄嗟にそう言った。

一体何が大丈夫なのか。むしろここは「大丈夫か？」と言うべきだったのではないか。本棚に歩み寄りながら自問する。

目的の本はすぐに見つかり、この部屋に用はなくなった。やがて扉の向こうからガヤガヤとした声が近づいてくる。昼休みも終わいだ。

「もう行くぞ。4限は3年がここを使うからな」

「あ、はい」

尾崎は手提げ鞆を引っつかむ。見ると、本棚には更に尾崎の本が増えていた。もう1段は全て彼のもので埋められている。そのうちの数冊は俺も読んだことがあった。親子の溝を埋めていく物語、家族で力を合わせて苦難を乗り越える物語。いずれにも共通して言えるのは、家族を扱ったものということ、そしてハッピーエンドだということだった。

それに気付いたとき、俺はふと考えた。

もし。もし彼が、家族と上手くいってなかったのなら。自分の家ですら、居心地の悪いものだったとしたら。

彼の居場所は、どこにあるのだろう。

「……大丈夫だ」

俺はもう一度、今度は力強く、言った。

そうか。きつと俺は、こう言いたかったんだ。

「大丈夫だ。お前の居場所は、俺が護つてやるから」

それっきり馬越が部室に姿を見せることはなかった。

「仕事が決まったのに放り出すなんて！」と榊は腹を立てていたが、誰も連れ戻そうとはしなかった。

馬越の言っていたことは間違いではなかった。彼も確かに被害者なのだ。彼が尾崎と同じ部活に所属しているというだけで変な目で見られたのであれば、それは不当な扱いだ。でもそれは尾崎を追い出す理由には決してならない。そして彼がそれに耐えられないのなら、これは仕方ないことだ。

「何か最近居辛そうにしてたしなあ」とは入船先輩の言。

「先輩が多すぎて気がひけたのかも……」、曰く桜井先輩。

「仲良くなるうとしつこく話しかけ過ぎちゃったかな」。これは仲本。

めいめいが馬越の心配をしていた。でもまだ馬越の籍はあったから。理由も分からないのに戻れなんて言って本当に辞められることを恐れていた。なんといつても、1年は3人しかいないのだ。

俺は部長として何か知らないかと口々に尋ねられた。俺は全てにノーと答えた。ここで俺が何か言うのは尾崎の噂を話すということだ。きつと尾崎はそれを望まない。どうせ近いうちに耳に入るとしても。

彼もまた、知らぬ存ぜぬを通していた。

結局、1人欠けたまま文集作成は進むのだった。

カズに呼び出されたのは6月の終わりだった。昼休みの社会科講義室。何だか嫌な予感がした。

ドアを開けると既にカズは我が物顔で居座り、パンを頬張っていた。

「やつほ、久しぶり」

「早いな。お前も登校の道中にパン買ってるのか？」

「いんや、普通にさつき購買で買ってきた」

「は？ まだ昼休み始まって5分も経ってないぞ」

「甘いよ榊本君。授業が早く終われば済む話」

「……ああ、体育でもあったか」
「そゆこと」

カズは二カツと笑うと持っていたパンの切れ端を口に放り込む。
確か入船先輩の好きなパンはイチゴミルクパンだったな、などとうでもいいことを思い出す。

「で、用事って何だよ」

「あー、その前にこれ貸したげるよ」

差出したるは1冊の文庫本。聞いたことの無いタイトルだ。

「……これは、何だ？」

「面白かったから。えのっち、知らないっしょ？」

「ああ。どういう話？」

「推理もの。って言っても人は死なないよ。『日常の謎』って知ってる？」

「聞いたことはある、くらいだな」

「んじゃあ読んでみるといいよ。一応お薦め」

「分かった。有り難く借りておくよ」

「本当に有り難く思ってるのならパンの10個や20個買ってくれてもよさそうなものだね」

「多いわ！ で、本題は？」

「んー、相変わらずだねえ。こんなヤツと付き合って、百合花ちゃんつまんないのかな」

「うるせえよ」

「えのっち、この部屋を維持するつもりでいるでしょ？ 新入生少ないのに」

急かしたのは自分だというのに、いきなり心を見透かされて俺は目を丸くする。だが前からコイツはこういうヤツだった。冷静に努める。

「何で知ってる？ 誰にも話してないはずだぞ」

正確には彼女以外には、だが。しかし彼女が言いふらすとは到底思えない。

「やっぱし。いやね、ちょっとカマをかけたんだけどさ。もしかしたら、って」

パンを食べ終え、包みをしまう。途端に目つきが鋭くなった。

「尾崎君の噂を聞いてね……まあえのっちは当然知ってるだろうけど。で、ウチの部活の後輩にそういうのに敏感な子がいてね。その子曰く、噂が立ったのは新学期早々だって言うからさ。えのっちの日記では尾崎君が入ってきたのは5月。文集を配った効果があったって書いてたでしょ。でも噂を踏まえると、避難所としてここにやってきたとも考えられる。……この辺の本、随分保存状態がいいね前からあったかな？ 尾崎君のだったりして？」

「……ご名答だよ。何でお前はウチの部室の本を把握してるんだ」「はっはっは、まあそれは置いといて。なら、随分と入り浸ってるみたいだね、彼。噂では生徒会もやってるんだよね。馴染めてるかは知らないけど、多分休める場所ではなかったんだろうね。あつちは1年生いっぱいいるし。ことと違って」

「一言多いぞ。自分の所が大漁だからって自慢しやがって」

「んなことないよ、ウチは例年が少なかったからね。多く感じるだけさ。でもとにかく、1年が少ないことが逆に彼にはプラスだったわけだ。ここは人もあんまり来ないしね。さて、えのっちがこの事実気づいたとする。尾崎君は自分の居場所を求めてここにやってきた。ならもう護るっきゃないって思うんじゃないかい、えのっちなら」

「見てきたように言いやがって、気持ち悪いな」

「そりやもう、中学からの付き合いだからね。だから、親友として忠告に来たのさ」

「……忠告？」

「そ」

カズはそこで一拍おいた。そして。

「やめときな。この場所を護るなんて、下らないこと」
そう、言いやがったのだ。

「下らない……だと……？」

「うん、そんなことをしても、誰のプラスにもならないよ。結果的にはね。どうせ来月の生徒総会でこの話は話題に上る。さっさと明け渡すって言いなよ。その方がえのっちも楽だろうし、部室が変わるのは3月、半年以上猶予があるんだからさ」

平然と言い放つ。俺がこの1ヶ月間考えてきたことを、たった一言で粉碎する。

こいつは何なんだ？ 何を言ってるんだ？ 何がしたいんだ？

何が――

「何が……分かるんだ」

「……」

「お前は部外者だろう！？ これは文芸部の問題だ。口出しは要らない。どうせ大変なのは俺だけだ。俺さえ良ければ問題は無いんだ。何だってお前が……いや、そうか。お前のところは部員が増えて大変だって言っていたな。そういうことか。お前もここを狙っているわけか。ふざけるな、何が親友だ。絶対に明け渡さない。ここは、文芸部の部室だ」

沸々と湧き上がる怒りを俺は抑えられずにいた。居場所を護る。俺の頭はそれだけに凝り固まってしまっていて、それ以外の事を考えられずにいた。

そんな俺を冷静に見つめるカズ。本当にこいつの頭の中は理解できない。初めて会った時から、ずっと。

「……まあ、ね。否定はしないよ。でも、それだけじゃないのも確か。うん分かった。こうなることはえのっちの性格からして予想はできたもんね。分かったよ。だったら……」

カズは立ち上がった。ドアをガラリと開けて振り向く。

「だったら、諦めさせてあげるよ。来月、全校生徒の前で、この私
が」

それは、吉沢一穂から俺への、宣戦布告だった。

4・June（後書き）

文章が荒削りですみません。

話を進めることを最優先に書いてます。

後から大量に修正を入れることになりそうですが御了承を。

5・July

「それではこれより、平成20年度丹木高校第1回生徒総会を行います」

ざわついていた体育館が次第に静かになる。マイクの声は壇上の議長、副議長、書記の名を読み上げた。

「――そして司会は私、川畑百合花です。どうぞよろしくお願いします」

そう彼女は名乗りを上げ、マイクの前で小さくお辞儀をした。多くの生徒の視界には入らなかっただろうが。

ついに始まった。俺は唾をゴクリと飲み込む。半年前にこの席には座ったが、その時は入船先輩が隣にいた。今日は、俺一人だ。

今や千人近い人間がこの体育館に存在している。病気等で休んだ者を除けば生徒は全員、教師も半分以上。一般の生徒はクラスごとに並んで座り、壇上に向かって前から1年、2年、3年、左から1組、2組、3組と続く。椅子はなく、全員体育座り。1年の更に前にはスペースがあり、真ん中にマイクが1本立っている。質疑応答用だ。その右端にはもう1本のマイク。彼女がその前に立ち、それを筆頭にパイプ椅子が並ぶ。そこは生徒会の席で、ずらりと1列に腰掛ける姿は思ったよりも壮観だ。更にその後ろには教師らが並び、成り行きを見守っている。基本的に会を取り仕切るのは生徒会で、先生らが介入することは殆ど無い。

そしてその反対側、体育館の左前隅に並ぶは俺たち部活の代表者。体育系と文化系に分かれ、2列になって即席の椅子に座っている。2月の生徒総会ではここに座る人数が倍になる。実質、年が明ければ部長は次の代に移るが、代わったばかりで不慣れなことを考慮して先代が同席するのだ。さながら関白である。

端には1人生徒会役員がいて、マイクを持っている。1年生なのだろう、とても緊張している様子だ。マイクを渡すだけなのだから

そう構える必要も無いのだが、大衆の目の前だ、無理は無い。彼でさえこれなのだから、実際に受け答えをしなくてはならない俺の気持ちがいかにどのものか察するのは難しくないだろう。

それに対して、彼女はやけに落ち着いていた。いや、彼女が慌てているのを俺は見たことがないが、1年にして司会という大役を仰せつかった身にしてはどつしりとし過ぎてやしないだろうか。

「本日の出席生徒数は823名。全校生徒の3分の2を満たしているので、本日の生徒総会は成立します」

3分の1以上が欠席って、生徒総会が成り立つ云々以前に学校閉鎖のレベルじゃないかと思ったりする。今まで成立しなかったことはあるのだろうか。

「まず始めに議長及び副議長の承認を行います。依存の無い人は拍手をお願いします」

パチパチパチパチパチパチ。

当然ほぼ満場一致である。ここでわざわざ反対して進行を困らせるような輩はそうそういない。

マイクを取った議長が二言三言述べた後、本日の議題を読み上げる。

「1つ目に各部活の代表者による決算と活動の報告」

……え？ ちょっと待て。最初？ おい、聞いてないぞそんなこと。しばらく考える余裕があると思っていたのに。

しかし周りを見渡すと、うろたえているのは俺だけのようなだった。配布資料を見る。議事を書いてあった。俺が確認不足だっただけだった。それにしても何だって。決算報告が資料の最後に載っているからてつきり。まあ仕方ない、どうにかなるだろう。マイクの声に合わせて一覧を目で追っていく。

生徒会の活動報告、決算報告、行事予定、今年度の目標。体育祭のクラス分けについて、賞品について、予算について、練習日程について。文化祭の出し物について、各種コンテストについて、禁止事項について、予算について。図書館のマナーについて、本の扱い

について、利用時間について。校内の美化運動について。時間の守り方について。意見箱について。制服廃止について。生徒会規約改正案。

……何かやたらと細かい。始めの1ページが丸々議題の羅列に使われている。どうやら生徒会も色々と模索しているようだ。うん、いいことだ。保守的であれとは別に思わない。あまり奇抜な改革をされても困るが。体育館にミラーボールとか。全教室オートロックとか。

部活の報告は体育系文化系と分かれて五十音順だった。すなわち文芸部なんてのは後ろに放送部と漫画研究会しかないという、かなり後の方になる。おお、「榎本諒太郎」である俺としては何か新鮮だ。

決算報告といってもウチの部活で使っている金なんて文集作成費とコンクルの参加費くらいのもんだ。すぐに終わった。あとは普段の活動と今後の予定を新入生へ説明したときのように話す。部員数には当然馬越や幽霊部員の同級生も加えた。森田先輩は「これが入部希望者が来るかもしれないから、しつかりやれよ」などと仰っていたが、さすがにそれは無いだろう。みんな聞いていなさ過ぎる。

報告が終わって席に座る。マイクを隣の女子生徒に手渡し、俺は考え事に入った。結局、俺だって他の部活の話なんか聞いちゃいけないのだ。

カズは俺を諦めさせると言った。この生徒総会で。ならばこの後の質疑応答に絡んでくるのは確実だ。しかしどうやって？ あいつは生物部の部長をやっている。今だって俺と同じ列に座っているのだ。同じく質問される側であるヤツが質問する側にまわることはできまい。だったら、知り合いに頼んだと考えるべきか。予め言う内容を伝えておけば可能だ。俺はカズの交友関係なんか把握していないから、誰が来るのかは分からない。俺だってそれなりに準備はし

てきた。言われうる質問を考えられるだけ列挙して、それに対する巧い対応策をシミュレートしてきた。しかし相手が5人とかになると厄介だな。連続で糾弾されたら流石に心が折れそうだ。カズのこただから絶対無いとは言い切れない。……まあいいさ。その場にならなきゃ分らない。テストと同じだ、今更足掻いたって大した意味は無いさ。

「それでは質疑応答に移ります。質問等のある生徒は前のマイクの所まで来てください」

彼女の声が体育館に響き渡る。少しの間があつて、生徒の中から数人立ち上がるものが現れた。クラスによつてはどよめきや小さな笑い声上がる所もある。何だあいつは。罰ゲームでもやらされたのか。

マイクの前に並んだのは6人。そのうち顔を知っているのは4人。話したことのある奴はいない。さて、この内の誰がカズの刺客か……と無意味な思考をめぐらそうとしたところで視界の隅に動くものを認めた。

「議長！ 私にも質問権を求めます！」

手を挙げてそう叫んだのは……カズだった。

こ、この野郎。こいつに「質問される側は質問できない」などという考えは通用しなかった。小細工なんか無い。こいつは本当に全校生徒の前で俺とタイマンを張るつもりだ。ヤバイ、何か勝てる気がしない。

議長は困った顔をして数秒考え込む。そして生徒会のメンバーを見渡すと、カズに向かって頷いた。しかし議長がマイクを手にするよりも前に、別のマイクからの声上がる。

「分かりました。どの部活に対する質問ですか？」

「……文芸部です」

「では、生物部への質問があるかもしれないので、最後をお願いします」

彼女の声だった。全く動じていないのは流石というべきか。カズ

は黙って座ることです承の意を示した。

会議が再開される。中央のマイクに目を戻すと、何故か人数は5人に減っていた。

「2年2組の脇岬です。野球部に質問があります」

1人目の男子生徒がそう言うのと、マイク係が野球部の部長の元へマイクを持っていく。密かに胸を撫で下ろす俺。初っ端から攻撃を受けるのはやはり避けたい。

「遠征費とありますが、これは部員全員の分なのでしょうか。また、これは交通費のみですか。選手の交通費のみと考えると金額が多い気がするのですが……」

拍子抜けしたことに、マイクの前の5人とも、想定していた質問ではなかった。1人文芸部への質問があったが、それは文集成費の細かい内訳についてであって、それを大まかに述べた後に次回からは明記すると答えて相手は満足したようだった。しかし気を緩めることは出来ない。俺の半径10メートルもないエリアにはラスボスが鎮座しているのだ。

マイクの前から人がいなくなった。

吉沢一穂が、立ち上がった。

俺の手にマイクが渡される。

俺たちは2つのマイクを挟んで向き合った。向こうは立ち、俺は座っているので距離があるとは言え若干見下ろされる形になる。

一穂は微笑んでいた。そこからは少しの悪意も感じられない。それでいて、いつもの軽さも無い。

ゾクリ。背筋に悪寒が走る。手に汗が滲む。拍動が強く、速くなる。

違う。やはり違う。今までとは違う圧倒的なプレッシャー。押し潰されそうになる重い空気。この変化は、質問の内容だけによるものではない。

目の前にいるのはカズではなかった。吉沢一穂という人間が、全

く異なる2つの雰囲気を持つというのは聞いていたし、部活の代表会議では実際に見てきた。でも、俺と話しているときのソイツは常に力ズであつて。今そこにいるのは、明らかに別人だった。

吉沢一穂が俺に戦いを挑もうとしている。俺は力ズですら理解できないし敵わないというのに。俺は、コイツに勝てるのだろうか。言い負かせるのだろうか。抗うことすら出来ないような、そんな気がした。

一穂がひゅうと息を吸う音がマイク越しに聞こえた。そして。

「2年1組の吉沢です。文芸部の部室について質問があります」
火蓋は切つて落とされた。

「知つての通り、丹木高校の部活動の種類は多く、一部では部室を共用しているのが現状です。それなのに広い社会科講義室を文芸部だけで使用しているのはいかなものでしょうか。部室の移転若しくは分割を求めます」

いきなりの直球。想定してはいたが、実際に言われるとやはり苦しい。言い逃れできるだろうか。とにかく、用意していた答えを口にする。

「文芸部の部員は15人で、部室での活動も活発に行っています。部室を持て余しているとは思っていません」

勿論一穂をこの程度で誤魔化せるわけは無い。すぐさま次の声が飛ぶ。

「15人というのは登録人数ですよ？ 実際に活動をしているのは何人ですか？」

「……活動をしているいないの区分に明確な基準はありませんので、答えかねます」

嘘を吐いた。最近明らかに来ていない部員は3人いる。だが、それを言ったらたちまち標的にされる。

一穂は一瞬押し黙る。嘘だということは見抜いているだろうが、それを口には出来ない。これは個人的な話ではない。全校生徒が聞

いているのだ。まさか「そんなわけないでしょ、知ってるんだから」などとは言えまい。

しかし追撃の手は止まない。

「では学年毎の内訳を教えてくださいませんか」

「1年3名、2年4名、3年8名です」

「ヤバイなと思った。だがここで嘘を吐くことはできない。数値は誤魔化せない。」

「最上級生が全体の半分以上を占めているわけですね。では早い話ですが来年、新入生を卒業生と同じ数だけ入れられる保証はありませんか？」

「ありません。ですが、少ないということも絶対ではありません」

「それは他の部活も同じ条件です。もしここ2年間の調子で新入生が4名だとすれば部員は総計10名になります。対して社会科講義室は通常の教室の2倍近くの広さがあります。10名で使うには、些か広過ぎると思いませんか？」

グツと言葉を詰まらせる。これも予測できた質問だ。だが、結局説得力のある反論は思いつかなかった質問だ。いや、そもそも後ろめたいことをしているのだから、答えられなくて当然なのだが。

「……教室を共用しているのは音楽系や美術系など専門の教室を必要とするものではないですか？ だとしたら、立地条件も芳しくなく普通教室である社会科講義室を空けたところで大した意味は無いと思われますが」

「そんなことはありません、普通教室で活動できる部活も多くあります。文芸部が社会科講義室を使いにくいと言うのであれば、」

一穂はゆったりと微笑んだ。勝ち誇った表情のように、俺には見えなかった。

「部室を換えることは双方の利益になると思いませんか？」

勝ち目は無い。俺はそう判断した。いや、自分はよくやったさ。端っから勝機なんて無かった。負け戦だってことは分かっていた。

それを知っていて尚俺は頑張った。一穂に一矢報いることが出来ただけでも上出来だ。だからせめて引き際くらいは見つともなくないようにしよう。その言葉は既に用意してある。俺は幕を下ろそうと全校生徒を見渡した。

その時。尾崎と目が合った。その瞬間。俺は自分を見失っていたことに気付いた。

何をやっているんだ、俺は。何を考えているんだ、俺は。何のためにこんなことをしているんだ、俺は！

自己満足のためなのか？ ただ一穂に抵抗したいというそれだけのために、俺はこんなことをしているのか？ 違っただろう？ 尾崎のためだろう？ 尾崎を助けるために、愛すべき後輩を護るために、俺はこんなことをしているんじゃないかったのか？ だったら、俺がすべきなのは降参することじゃない。自分の身を案じることじゃない。何がよくやった。何が頑張った。何が上出来だ！ 抗ってやる。限界まで抗ってやる。あの時俺はそう決めたはずなんだ。

「……そうは思いません」

自然と声が漏れた。一穂に抗いたくて、言い分を否定したくて、何も考えずに出た言葉だった。

先程の一穂の言葉から大して時間は経っていないようだった。一穂は俺を見つめていた。次の俺の言葉を待っている。しかしどう続ければいい？ もう何も考えは残っていない。ここからどうやって突破口を見つけるんだ？ そもそもそんなものはありはしないのか？ いや、そんなことを考えている場合じゃない。悩むんじゃない。考える。言葉を搾り出せ――

「時間が押しています。議論はやめてください」

マイク越しの声でした。俺でも一穂でもない声でした。

声の主は考えるまでもなかった。マイクを持っているのはあと2人しかない。

「議題はまだ全然片付いていません。次の議題に入りたいと思いま

す」

「しかし議長！」

一穂が抗議する。議長は困った顔をする。声は続ける。

「では、判断を多数決に任せたいと思います。承認が半数に達しなければ、議論の継続を認めます」

そう言ったのは彼女だった。相変わらず淡々と、言葉をつなぐ。

一穂は明らかに動揺していた。確かにこれは想定していない展開だろう。しかしそれにしても……

「文芸部が現在の部室を継続して使用することを承認する人は、拍手をお願いします」

パチパチパチパチ。

拍手は少なかった。まばらと言うほどではないにせよ、先程の拍手よりは明らかに小さかった。

これは……どうだ？ 俺には判断しかねる。だが、どちらかと言うと400人分の拍手としては足りない気がした。

議長を見据える一穂。副議長と相談する議長。こんなことは今までに無いのだろう、生徒会がざわざわしている。全校生徒の総意はどうなる？ 議長はどう判断する？ いや、少ないのなら続行だ。

今のうちに俺は反論を考えるべきだ。今の介入によって俺は言い直す機会と時間を得た。折角の天恵を無駄にするわけにはいかない。

一穂が何と言ったかを思い出せ。そして、穴を見つけるんだ。勝負はまだ終わっちゃいないんだ。

ところが。

「では、過半数に達しましたので、文芸部の部室は承認されました」
ざわめきを破って、さも当然のように、彼女はそう宣言した。

それから1時間もせずに生徒総会は終了した。会議は別段滞り無く進み、俺は一般の生徒として会に参加し、全ての議事は承認された。これが本来の姿のはずなのに、次々と可決されていく案を聞いていると何だか不思議な気分だった。

生徒らが退場を始めてすぐに、俺はこっそりと携帯を開き、彼女にお礼のメールを送った。本当は直接言いたかったのだが、今近づけば変な噂を立てられかねない。

部室で帰る仕度をしていると彼女から返事が来た。「どういたしまして」。それだけだった。

教室に向かうと彼女の姿があり、俺たちは一緒に下校した。長い一日が終わった。

文芸部は勝利を収めたのだ。

6・August

「せんばーい、調子はいかがですか？」

榊が机に近づきながら朗らかにそう尋ねる。

「んー……、大体出来はしたんだが……」

「本当ですか？ 見せてくださいーい」

「最後まで書き上げてからな」

「えー、私は先輩の担当なんですよー？ なのに読ませてくれないんですか……」

「あんまり汚いと人に見せられないだろ」

「じゃあじゃあ、問題編だけ！ 問題編だけ読ませてください！ ちよつと推理してみたいです」

「だから全体的にぐちゃぐちゃなんだって」

「でも人の意見を聞くのは早い方が効率いいと思いますよ？」

「……分かったよ」

俺は机の隅にまとめた原稿用紙を手元に寄せ、途中の数枚を榊に渡した。榊は隣の席に座ると、楽しそうに文章を目で追った。

隣で読まれているのに続きを書くななんて出来そうにない。俺は窓越しに空を見上げる。入道雲が大きくそびえ立っていた。

丹木高校は夏休みに突入していた。とは言っても別に高校が閉鎖されるわけじゃない。短いお盆期間を除いて、教務室で鍵を借りさえすれば自由に行動可能だ。

そして今日は俺が担当である榊と決めた一次締め切りだった。生徒総会までは準備で頭がいっぱいでそれどころではなかった。終わってもなかなか頭が切り替えられずにいた。思ったよりも筆が進まず、今日は早めに部室に来て書いていたのだ。しかしそれは失敗だったかもしれない。

青い空。白い雲。そしてこの暑さ。言うまでもなく夏である。正

に夏真っ盛りである。この部屋にクーラーは無い。市の図書館とかで執筆していればよかった。直射日光は避けているものの、やはり暑いことに変わりはない。来年もここが部室であることが決まったわけだし、部費でクーラーをつけようか。いくらか部員から徴収して。いやいや、生徒総会で糾弾されるのは目に見えている。第一、取り付けようとする段階で学校が認めてくれないだろう。暑さでぼんやりした頭は変なことを考えるようだ。お陰で一向に小説の終わりが見えない。いや、プロットはあるのだ。ただ、具体的に文章を書こうとすると、何かなあ。

「……んー、難しいですね」

渡した部分を読み終えたらしい榊が顔を上げて言った。

「何でしょう。厨房のおじさんがすごい顔で睨んでいたとか。『変な噂を立てたら承知しないぞ！』って」

思わず吹き出してしまふ。しかしよく考えてみれば、何気無く言ったにしてはなかなか近いところを突いている。やはり簡単だったかもしれない。カズだったら一瞬で解いてしまうんだろうな。

「あー、何で笑ってるんですかー」

「いやいや、別に。で、どうかな？」

「うん、結構面白いです。私ってあんまり推理小説とか読まないんですけど、素朴な疑問っていうか、人が死なないミステリーって何か新鮮です」

「そりゃよかった」

「でも、何て言うか、必然性が無いですね。手代木君が推理をする理由が別に無くて、何か唐突な感じがします。あと、時々主語が誰か分からなくなる箇所がありました。あとあと、ここの段落は今までの流れを邪魔する気がするので、無くした方がいいかなあとか」

「うわ、辛辣。シヨック。やる気無くす」

「ええー、先輩が言えって言ったんじゃないですかー」

そう言っただけ。ワザとには違いないのだが可愛らしい。

「悪い悪い、真摯に受け止めるよ。全部書き上げた時に憶えていれ

ば」

「それ真摯って言わない……」

律儀に突っ込んでくれたところで榊はふと思い出したように訊いてきた。

「あれ？　そういえば先輩って、前に紹介していた本はミステリーじゃなかったですね？　鞍替えしたんですか？」

「まあ俺はジャンルとかあんまりこだわらないからな。マイナーなものなら」

「有名作品は？」

「何か避けちゃうな」

「ふーん。でも好き嫌いしないってすごいですね。オールマイティって格好いいです」

「万能ってワケじゃない。あちこちの未開の地を少し耕していい気になってるだけさ」

榊と雑談をしつつ、時々言葉を適当に流しながら、どうにか小説が完成したのは冬だったらとつくに暗くなっている時刻だった。アドバイスを聞いて文章を直し、改めてパソコンで出力して読むということで話はまとまった。次の締め切りはお盆明け。

「お疲れ様でしたー」

「お疲れ」

互いに軽く礼をする。鍵を閉め、教務室に鍵を返して玄関へ向かった。

「そういえば本当にお疲れ様でした、生徒総会。今更ですけど」

「ん？　ああ、ありがとな。本当に今更だけど」

「むー……」

「でも本当にありがとうな、あの時は」

「え？」

「拍手、してくれたんだろ？」

あれから2週間弱が経過した今、俺の頭の中にはある1つの結論

が浮かび上がっていた。

いくら何でも文芸部の勝手な主張に400人も人間が賛同してくれるとは思えない。だからその400人の中には文芸部のメンバーが絶対に入っているはずだった。彼らはもしかしたら、友人達にも頼んでくれたのだろう、何かあったら文芸部の味方をしてくれと。大して現状に不満の無い人間なら従ってくれるはずだ。

勿論彼女がいなくては俺は力ズに勝つことは出来なかった。彼女が話に割って入り、半ば強引にカズの質問を却下したからこそその結末だ。しかし彼らの努力無しでもまた、勝利は為し得なかった。そうやって小さな積み重ねがあつて、大きな偶然に助けられて、その結果が今回の勝利だと俺は思っていた。

榊ははにかみながら答えた。

「……はい。頑張りましたよ、少しでも大きく聞こえるように。友達にも頼みました。つて言っても、ほんの2、3人ですけど。大したことは出来なかったけど……それでも、それが先輩の助けになったのなら、とつても嬉しいです」

「誰が言い出したんだ？」

「誰ともなしに、ですよ。でも敢えて言うなら……入船先輩ですね。『困っているのを助けずして何が仲間だー！』みたいなこと言つて」

「……幸せ者だな、俺は」

本心からそう思った。先輩思いの後輩と、後輩思いの先輩と、そして同輩思いの副部長に囲まれて。

とても、幸せな気分だった。

榊とは家の方向が逆だったので、校門で別れた。

バス停でバスを待つ。時刻表を見ると、タイミングの悪いことにバスが出たばかりだった。彼女を話していれば時間も気にならないうのだが、今はいいない。まあ当然といえば当然だ。夏休み中は生徒会の仕事もあり無いだろうし。

と、後ろから肩を叩かれた。

「ヘイヘイ！ 何気に久しぶり」

後ろにカズが立っていた。生徒総会で顔を合わせて以来だった。

「何やってんだ？」

「何って、これから帰るところだよ」

「いや、だから、何の用事があつて？」

「薄情者だねー、君は。夏休み中ずっと学校に来なかったら可愛い動植物が死んじゃうでしょうが」

「ああ……成程。当番だったのか」

「うーん、っていうか、結構頻繁に来てる。宿題もはかどるしね」

何と。コイツは宿題をさっさと片付けてしまふタイプだったのか。意外過ぎる。

「さて、一緒に帰ろうよ。最近えのっちはずっと百合花ちゃんにベツタリで、わたしや寂しいよ」

「気色悪いことを言うな」

「まあまあ。隣、いいかい？」

「……どうぞ」

ベンチに並んで腰掛ける。風が吹いた。大分気温も下がり、それほど不快ではない。

「いやはや、参ったよ。今回は私の完敗だ。降参降参」

カズはスカートの裾を直しながらそう言った。生徒総会のことだろう。

「うんまあいいや。私も考えが足りなかった。ちょっと確実性に欠けてたね。今度は別の方向で攻めてみよう」

何やら物騒なことを言っている。俺としては、こいつとやりあうのは二度と御免被りたいのだが。

「勘弁してくれ。この一件で俺がどれだけ神経すり減らしたと思つてんだ」

「はっはっは。まったく、無茶するね。手回しするなら文芸部内部だと思つてたけど、まさか生徒会にまでとはね。流石に私もビビッ

たよ」

「その心意気に免じて見逃してもらえると助かるんだがな」

「そうは問屋が卸さないよ。親友の悪を見て正さざるは即ち是れ親無きなり、ってね」

「論語か？」

「いや、今考えた」

「……そうかよ」

どうにも掴めない。当時はあんなに鬼気として俺と対峙していたというのに、今はこの有様だ。一体何がしたいのか。

「お前が俺の敵なのか味方なのか、いい加減はつきりして欲しいな」
目をぱちぱちと瞬かせるカズ。

「ん？ 何言ってるの。そんなの味方に決まってるじゃん。あの時も言っただしよ、親友としての忠告だって」

「俺はそれを望んでないんだがな」

「うーん、それは難しいところだね。まあいいけどさ、どっちでも別にえのつちに意地悪したくてやってるんじゃないってこと、分かって欲しいな」

分かってている。多分、分かっているのだ。でもそれが迷惑で。好きにさせて欲しくて。何だか反抗期みたいだな。そうなると俺が息子でカズが母親か。それは嫌だ。

「じゃあ、忠告ついでもう一つ。言われるまでもないことだとは思うけど」

何でもないことのように、でも豪く真面目な声で、カズは言った。
「百合花ちゃんのこと、守ってあげなよ」

一瞬、言われるまでもないと思った。しかしすぐに違和感を覚えた。それは漠然としたものではなく、何か具体的に、彼女に対する悪意が実際に存在しているような、そんな確固たる口調だった。

「守る？ 何から？」

だからそれは、当然口にすべき疑問のはずだった。

そのはずだったのに、それを聞いたカズは目を見開いた。こいつ

が驚く表情を、俺は初めて見た。

「何って……あんた分かってないの！？ 百合花ちゃんがあんたのために何をしたか！」

カズは大声で俺を糾弾し、それから信じられないとばかりにわざとらしく大きな溜息を吐いた。

「ホント無いわー。あんた本当に百合花ちゃんと付き合う資格無いわー」

「……何のことだよ。確かに多数決の時に少しサバを読んだかもしれないが、別にそれで彼女1人に責任を押し付けられることはないだろ」

「……それだけ？」

「……」

意図を汲み取れずに黙っていると、やがてカズはゆるゆると首を振った。

「分かったよ、教えてあげる。誰にも知られるべきではないことだけど、あんただけは知っていなきゃいけないことだからね」

「じゃあそもそもその誤解を解くことからいこうか。生徒総会のあの結末。えのつちは考えてるでしょ、どこまでが偶然で、どこからが必然なのかって。冗談じゃない。全部必然だよ。会が始まった時点で、えのつちの勝利は既に決まっていたんだ。冗談だと思うかい？
それが百合花ちゃんに失礼だって言ってるの。」

「じゃあ司会が百合花ちゃんだったことは偶然だと思う？ 確かに、百合花ちゃんならこなせるだろうね。聡明だし、積極的だし、度胸がある。実際、大した問題は無く会は終わった。でも、それは私もあんたも百合花ちゃんをよく知ってるからこそその考えだよ。」

「言うまでもないことだけど、百合花ちゃんは1年生だ。まだ入学して3ヶ月強しか経っていない。勿論生徒総会なんて初めてだよ。そんな不慣れな新入生が、司会をやれると思う？ たった3ヶ月の付き合いでそんな大拔擢、普通はしない。百歩譲ってそこはいいと

しても、1人でやるっていうのは考えにくい。去年の生徒総会を思い出してみなよ。あんたも私も、今回と同じように前にいたけど、前部長が隣に座っていたでしょ？ 想定外のこと起きてパニックにならないようにね。だからね、おかしいんだ。百合花ちゃんという1年生が1人でマイクの前に立つなんてことは。

でもまあね、可能性は0じゃない。もしかしたら生徒会の先輩に前々からの知り合いがいたのかもしれないし、彼女を快く思わない先輩が恥をかかせようと押し付けたのかもしれない。でもね、そこにえのつちが絡んでくると考えると、こう考えたほうが自然だね。百合花ちゃんは強硬に主張したんだ。私が1人でやりますってね。

それは何故か？ 勿論、生徒総会の流れを操るためだ。議長に1年生がなるのは到底無理だし、副議長や書記には進行に影響を与えるような力はない。でも司会なら。予め決められたシナリオを読み上げ、何かあれば議長の指示を仰げばいい存在なら。下準備さえすれば不可能ではないんじゃないかな？

それと前後して、百合花ちゃんは生徒総会の進行に関して2つほど意見を言った。その2つはえのつちも気づいているよね？

まず1つ目。最初に百合花ちゃんが読上げた議題の内容。やけに細かく分けられていたよね？ 生徒会の報告は部活動報告に含めてよかったし、体育祭関係も全部『体育祭について』でよかった。文化祭も図書館もね。実際、前回はそうだったはず。どうしてわざわざそう変更したのか。恐らく『議題を分かりやすくするため』とかを理由として挙げたんだろうけど、その効果は受ける印象を考えれば単純明快。そう、『やることが多く感じる』んだ。

もう1つ。これは驚いたよ。部活の報告が最初に来てるんだもん。前は真ん中辺りだったのに。これは何て言って納得させたんだろうね？ 早く終わらせて部長らの負担を減らすため、とかかなあ。この真意も簡単だね。猶予を無くすことで質問を受ける危険を減らすとしたんだ。生徒の中には話し合いなんかそっこのだけで配布資

料を読み進める人がいるからね。後になればなるほど、質問を受けやすい。資料では部活のことが最後のページに書いてあったのもミソだね。ページ通りに読んでいたら、疑問点が浮かぶ頃には質問の機会は既に失われている。恐ろしい仕掛けだね、全く。

でも、でもね。こんなのは下地に過ぎなかったんだよ。終わってからそれに気づいたのが悔しいなあ。

百合花ちゃんは私が出てくることも想定済みだったんだろうね。そしてその対策も。あの時百合花ちゃんは言ったよね。『生物部への質問があるかもしれないので最後をお願いします』って。『生物部への質問があるかもしれないので』？ とんでもない。そんなのは口実だよ。要するに文芸部への質問を最後に持ってきたかったのさ。わざわざ質問の相手を聞いてきたしね。そしてそれは、他に文芸部に質問をしたい人に対する牽制にもなった。最後に私が文芸部に質問するのが決まっているのに、それでも質問しようとする人はなかなかいないんじゃないかな。内容が被ったら気まずいもんね。さて、これで文芸部への質問は最初の議題の最後になった。ここで、今までの布石が意味を持つてくる。ここでえのっちがすんなり負けてしまったら百合花ちゃんの努力は水の泡なわけだけど、それはどうにか避けられた。そして言い合いが長引くと見るや、百合花ちゃんは時間が押していることを理由に多数決に持ち込んだ。

普通にやったら私の勝ちさ。活動が制限されている文化系の人たちが味方についてくれるからね。でもね、えのっち。生徒総会を真面目に聴いてる人なんて、一体どれくらいいると思う？ 参加する気のある人は何パーセントだと思う？ 殆どの人はこう考えているはずだよ。『どうでもいいから早く終わらせて帰りたい』ってね。もう会が始まって15分経っている。なのに議題はたくさんあるうちの1つも終わっていない。とっとと済ませたいと考えている人たちは焦るよ。このペースじゃ終わる頃には部活もできない。でも勿論そんなことはなかった。1時間強で事は済んだ。何故か？ 他の議題は全部、簡単な説明や拍手による承認だけで済むものだった

からだ。それを細かく表記することで、まだ当分終わらないという風に生徒達に思わせたんだ。そしてさらに百合花ちゃんはこの承認されなかったら議題は移らないということを仄めかす。

あとはもう分かるよね？ 学校の運営に興味が無い人たちはみんなえのつちの味方になる。元々100人ほどだったのが200人になり、400人になり、あとは百合花ちゃんの主観という名のサバ読みで過半数になる。こうして私の意見は途中で却下され、文芸部は社会科講義室を守り通すことができたというわけだ。めでたしめでたし。

……これで終わればいいんだけどね。ここまで言えば分かると思うけど、百合花ちゃんの払った代償はそりやもう大きいよ。1年生の分際で生徒会の内容に口を挟み、生意気にも司会を1人でやると言い出し、その上本番でも勝手なアドリブを利かしてくれたんだから。百合花ちゃんの元々の性格も相まって、随分と先輩方の不興を買ったと思うよ。入学早々これじゃあ、高校生活3年間を丸々投げ打ったと言ったら過言かな？

こうなることは予測できたのに、それでも百合花ちゃんはこの方法をとることを選んだ。えのつちを助けるためにね。どうだい？ 百合花ちゃんをどこかに連れて行ってあげるくらいじゃあ返せそうにない恩だと思っけどね。部室を守る、それだけのためにここまで対価を支払う必要はあったのかな……でもまあ、過ぎてしまったことはしょうがない。精々百合花ちゃんを大切にしておけるんだね。泣かしたりしたら私が許さないんだから、と常套句で締めてみる。

あ、バス来たね。……おい、えのつち。聞いてる？ ところで例の本はもう読んだ？ 面白かったかい？」

7・September

「それではー、文化祭2日目、今日も楽しく頑張りましょー！ え
いはいおー！」

「おー」

円陣の中で手を突き上げる仲本。それに続くその他大勢。

一致団結を示した直後、めいめいの場所へ散らばる。そのうちの多くは文芸部とは何の関係も無い。要するに、皆好き勝手に楽しみに行ったのだ。別に団結力が無いわけではなく、単に仕事が無いだけである。

文芸部の仕事は文集の販売。売り子が2、3人いさえすれば事は足りる。それもそれほど有名なわけじゃない。部員が買う分も含めて、今年の発行部数は40部だった。昨日売れたのは7部。部員と部室と顧問を除いて、残るは16部。去年と同じくらいだ。主な購買層は部員の友人やOB、OGの先輩方。まあ身内商売だが、どこもそんなもんだろう。

今日は文化祭2日目、土曜日。一般の人にも解放されているから、昨日より断然客が多い。俺もその中に混ざりたい気もしたが、部長たるものそう遊んでもいられない。昨日は結構他の部員に任せて彼女と出歩いていたから、今日は終日詰めているつもりだった。

まだ午前中は客も少ない。カウンターを仲本に預け、部室の奥で文集を開く。天の川vol.28。1部200円。表紙をめくると目次もそこそこいきなり俺の小説が始まる。どうにもこういう目立つ位置には書きたくなかったのだが、立場上仕方が無いか。

ページを繰る。記憶と違う描写があるのを見つけ、おやと思ったが、そこは榊に言われて書き直した部分だった。自分の頭がちゃんと更新できていないなと俺は苦笑する。こんなんじゃ駄目だよな。気持ちを込めて書いていない証拠だ。

あの後修正版を持って俺たちは再び部室で落ち合った。榊は今度

は全体を通して読み、大体良いと思いますと言った後で、流れに対する意見を2、3出してきた。それはどれも的確な意見だったのだが、俺がそれに応えられるスキルを持ち合わせておらず、どうも張りぼてのような部分があることも否めない。それでも夏休み明けの編集会議では、俺の小説は一発で審査をクリアし、肩の荷を下ろすことが出来た。

他の執筆陣と言えば、先輩らは勿論無事に小説を書き上げ、初めてで要領を掴めない尾崎も、担当になった先輩の力添えでなんとか筆を置いた。編集の方は3年生がメインだったので殆ど問題も無く（入船先輩が古いデータを上書きしてしまうというハプニングはあったが、そこはちゃんと仲本がバックアップを取っていた）、文化祭前日には文集の入ったダンボールが部室に鎮座していた。

本来ならもっと早く目を通しておくべきなのだが、何だかんだと後回しにしているうちに今になってしまった。まあ、内容に関しては仲本たちがチェックしているだろうから、乱丁などの大きな問題は無いだろうと思う。

作品全部を読む必要は無い。部員全員は編集会議に出席しており、推敲前ではあるが一通り全作品を読んでいる。尾崎のファンタジー、入船先輩の家族コメディ、桜井先輩の恋愛モノ。霧山先輩は去年は殺人ミステリーだったが、俺が日常ミステリーを書きたいと言ったところ、ジャンル被りを考慮してホラーにしてくれた。何だか申し訳ない気もするが、実はこの人は何でも書ける人で、今回も他作品と比べて全く見劣りしない出来だ。そういえば去年の内輪文集では現代ドラマを書いていたし、聞いたところでは文芸部に入って始めて書いたのはSFらしい。

神は俺を読書につけてオールラウンダーと評した。だがそれは霧山先輩のような人に与えられるものであって、俺は違う。俺はただ、周りと同じでいなくなかったんだ。何か違うものを持っていたかったんだ。でも、何か1つで秀でようとしても、上には上がいる。だ

から、俺は競争相手のいないものをいくつか制覇して、優越感に浸っていたんだ。

昔から流行が嫌いだった。皆と同じ帽子を被るのが嫌で、皆と同じゲームを買うのが嫌で、皆と同じ本を読むのが嫌だった。皆が知らないことを知っているのが嬉しくて、皆が出来ないことをできるのが楽しくて。その逆ですら、嫌ではなかった。

いつしか俺は積極的にマイナーなものを求めるようになった。少数派というレッテルを貼られるものに惹かれるようになった。それは前々から好きだった書物にとりわけ表れた。名前を耳にしたことの無い本の中に良作を見出すのが俺の趣味になっていた。

多分それは俺が自分と他人を区分するための手段だったのだろう。下らないとは思っけれど、己のアイデンティティを確立するために必要なことだったのだ。そしてそれは多かれ少なかれ、誰でも持っている感情だと俺は思う。いや、今そう思った。

ところでカズはそんな俺を知っていて時々本を紹介してくれる。ヤツは推理小説大好き人間なので渡されるのは大抵ミステリーになるが、それは大抵俺の希望通り、それほど名は売れていないがどこか引き込まれるものを持つ作品である。1ヶ月ちよつと前に借りたのは日常ミステリーで、これが見事に俺のツボにはまった。シリーズの1作目だったのだが、俺はその後続編を全て書店で買い、一気にファンになってしまったのだ。続編が待ち遠しい。

そんなわけで影響を多分に受けた俺は文化祭の文集に書く小説を日常ミステリーにすることにした。ネタも見つかった。先日竹内から本を返してもらった時に変な話を聞いたのだ。何でも全国のラーメンを食べまわっているという知らないオヤジが、近くにある学生向けの安っぽいラーメンをベタ褒めしたらしい。結局、事の真相は不明だったが、俺なりの結論を出して1篇の小説に仕立てた。竹内にはネタを提供してくれたお礼にその内ラーメンをご馳走するとして。勿論安いやつで。

「いらつしゃーい！ 記念すべき14人目のお客様だ、ドンドンパフパフ！」

カウンターの方から声がした。口調から察するに、客は仲本の友人のようだ。俺が顔を出すのも何なので、そのまま奥で様子を伺うことにする。14のどの辺がキリがいいのかということには突っ込まないでおく。

友人某氏は仲本と一通り談笑した後、文集を買って去っていった。帰り際に「望美も何か書きなよー」「戦隊モノとか書いてみたいんだけどねー」という会話があったのを俺は聞き逃さなかった。カウンターに戻るなり、俺は話を振る。

「特撮とは、また珍しい分野だな。来年の文集が楽しみだ」

「うつつ、榎本君はそういうこと言わない人だと信じてたのにー！」

机に突っ伏して泣くフリをする仲本。弄り甲斐あるな、こいつ。

「でもそういえば仲本さんの書いた文章って読んだこと無いな。去年の『碧空』もメッセージだけだったし」

碧空とは年度末に発行する、卒業する先輩へ向けて送る文集のことである。発行部数も少なく読む人も限られているので、寄稿のアイドルは低い。よって紙の質は悪いが、全体の文量は相当なものになる。版權ネタや内輪ネタが多いのも特徴だ。ちなみに、部内では「文集」と言えばこの文化祭に出品する「天の川」を指す。

「私ってば専ら読む側の人間だからさー。情景は浮かぶんだけど、それが動かないんだわ」

「そんなもんさ。書いてるうちに動き出してくるんだよ」

「うーん、そうかね。できたら今年の『碧空』には書いてみたいんだけど。ていうか去年も挑戦したんだけどねー。ムズイわー」

だらーんと、机にスライムのように覆いかぶさる。今客が来たら仲本はどんな反応をするのだろうか。少し見てみたい。

校内放送のスピーカーからはクラシックのBGMが流れている。遠くに喧騒。社会科学講義室周辺は静かだ。耳を澄ませると、部屋を

近くしてカズの声らしきものが聞こえる。生物部は今年は何やつて
るんだっけな。パンフレットを確認するとどうやらクイズらしい。
全問正解者には鉢植えのプレゼント。あいつのことだ、ものすごく
マニアックな問題を紛れ込ませているに違いない。

「ねえ、榎本君」

さて何か話題はあったかなと考えようとしたところで話しかけら
れた。

「ん？」

「彼女さんとは、あれからどうなの？」

あれとは何のことだろう。まあ単純に考えて、仲本が彼女と会っ
た4月だろうか。

「どうって言われてもな」

「うまくいつてるの？」

「まあ、ぼちぼち」

「……そう……」

「何でそんなことを？」

「いや、ほら、なんかさ、あんまり一緒にいるの見ないなーって」

そうだろうか。毎日昼は一緒に食べているし、帰りも大抵同じバ
スなのだが。でもまあ確かに、昼を食べるのは人目に付かない場所
に現地集合だし、俺の帰りも部内では一番遅いから、見ないといえ
ば見ないのかもしれない。あまり見られたいものでもないしな。

「心配には及ばんよ」

「そう。ならいいんだけど……」

仲本は少し考え込み、ぽつりと言った。

「……もうちょっと、はつきりさせた方がいいと思うな」

「え？」

「いや、あのね、私はいいんだよ。でもほら、何て言うかさ、ある
んだよ、色々さ」

「？」

よく分からない。歯切れが悪い。仲本らしくもない。

仲本は困ったような顔をして、視線をずらす。

「……ごめんね、変なこと言って」

「全くだ」

「うーん、何だろう……もっと付き合ってるっていう雰囲気醸し出したほうが、彼女さんも嬉しいと思うよ」

「はあ……」

あまりパツとしないことを言われてもなあ。大体、仲本と彼女との間に接点があるのだろうか。どうして仲本は彼女のことを気にするのか。色々とある？ それはカズが警告していたことと何か関係が？

どうもモヤモヤとする。だが気になって仕方がないほどのことでもない。仲本もはつきりとは言えないようだったし、俺もどう質問すればいいかもよく分からない。掘り下げることとはできない。なら放っておいてもいいか。何かあるならそのうち、だ。

そこに新たな客が来た。中年の女性の方の2人連れだった。一般客だろう。

「いらっしやいませー！ 文芸部へようこそ！」

仲本が明るい声を張り上げる。ホッとしているように、俺には見えなかった。

午前の仕事が終わりに、俺はいつもの場所に向かった。校舎には多くの人が訪れているというのに、ここはいつも通りひっそりとしている。俺が睨んだとおり穴場らしい。

そこにはいつも通り彼女が座っていた。が、驚いたことに着物を着ていた。そういえばクラスで甘味処をやると言っていた。そういえば着物を着るって食べ物を食べるみたいで重複表現ばい、などと考えながら声をかける。

「綺麗だよ」

「ありがとうございます」

心なしか頬が赤いように見えた。化粧かもしれないが。

「先輩もいかがですか」

そう言つて差し出す手には団子とお茶。湯のみでなく缶なところが惜しいが、そこは学校の決まり、出来合いのものしか販売できないのだ。有り難く頂戴して隣に腰掛ける。どちらを先に食べるか迷つたが、考えた挙句、弁当からにすることにした。

ところで彼女の弁当を食べ続けてそろそろ半年になるが、見事な腕前だ。肉、魚、野菜とバランスが良く、配色も鮮やか。冷凍食品も多いのだろうが、とにかくバリエーションが豊富で飽きない。大した手間ではないと本人は言うが、それでも貴重な朝の時間を使っているわけだし、それも毎日だ。これを作り続けるという努力には感服する。

最早彼女の弁当を食べることが習慣となつてしまつた俺は、時々自分に言い聞かせるようにしているのだ。この現状を当たり前だと思つてはいけない、俺は幸せ者なのだ、と。

……これくらいで切り上げよう。他人ののろけ話など聞いていても面白くあるまい。

「先輩の小説、読みました」

彼女がそう切り出す。昨日渡したのだった。勿論金は俺が払つた。それにしても、榊といい、他の部員たちといい、彼女といい、自分の書いたものを読まれると言つのはどうもムズムズするな。悪い気はしないが。

「どうだった？」

「面白いと思います。先輩っていつもああいうこと考えてるんですか？」

「だから違つて。あとがきにも書いたたろ、貰つたネタだよ。でもまあ、日頃からああいう考え方をするのは面白いと思うけどな」

「ああいう？」

「何だつて謎に仕立てて解くつていう心構えさ。カズなんかは実践してるしな」

生徒総会のことを思い出す。あれは、カズだったからこそ見抜け

たことだった。普通に見ていれば、生徒会のやり方がちょっと変わったくらいにしか思わなかっただろう。周りに目を光らせているから、何か裏があると思っっているから、カズはそれを事件と認識したのだ。

まあ、常にそんな生き方は疲れるだろうから、俺は真似しようとはあまり思わないが。

「あの時は本当にありがとうな。助かった」

「いえ、私は自分に出来ることをしたまでです」

お盆前にカズの話を聞いてすぐ、俺は彼女に確認を取った。大体はカズの言った通りだったようだ。彼女の思惑は先輩らに知られることはなく、全ては彼女がさり気無く話を誘導した結果だった。

その後の人間関係についてそれとなく聞いては見たが、大した変化があつたわけではなさそうだった。精々多数決の判定について次からはちゃんと先輩の判断を仰ぐようにと言われたくらいだという。俺も文化祭前に生徒会室を訪れたが、険悪な雰囲気は感じ取れなかった。カズの言うほど深刻な問題にはなっていないようだ。

「借りっぱなしもよくないしな、何か困ったことがあつたらなんでも言ってくれよ。俺も出来る限りのことはする」

「ありがとうございます」

言下に主に生徒会の先輩についてという意味を持たせたつもりだった。彼女には伝わったのだろうか。いや、伝わらない方がいい。伝わるということは、彼女がそういう不安を感じているということなのだから。

居心地が良くてゆっくりし過ぎてしまった。時計は1時半を回っている。部室に戻ると、そこには榊が1人でカウンターに座っていた。

「あ、先輩。こんにちは」

「おう。って、何で1人？」

シフトでは常に2人いるように割り振っていたはずだが。1年生

を一人置いておくのは心許無いし。

「え、えっと……」

「ちよつと待て、考える」

何やら困った顔をして口を開きかけた榊を、手を広げて静止する。見ると机の上の文集が3冊になっている。昼前に俺が抜けたときには11冊だったはずだ。高が2時間弱で8冊も売れるか？文化祭が終わるまであと4時間。確かにそれくらい売れないと完売は難しいかもしれないが。

……これは何かあったな。カズに倣うわけではないが、せつかくの祭りだ。俺も1つ遊んでみるか。

ちなみに去年は4冊売れ残った。その分の負担は当然部員に回ってくる。まあ、元々赤字覚悟の値段だから仕方ないのだが。

シフト表をチェックする。今の時間のもう1人は……入船先輩。

記憶を遡る。俺が外で昼飯を食べ、ここに来るまでに異変は無かった。加えて俺は彼女を仕事先——1年1組——まで送った足でここまで来たから、客の来る場所は大体通った形になる。1年1組はクラスの出し物がある普通棟の端にあるし、社会科学講義室は部活の出し物がある特別棟の端にあるからだ。

となると考えられるのは……

「体育館、だな」

俺がそう呟くと、榊はゆっくりと頷いた。口元に笑みを湛えて。

「名探偵、ですか？先輩」

俺は苦笑して踵を返した。放っておいてもさしたる害は無いかもしれないが、派手なことをされていると恥ずかしい。釘を刺しておいたほうがよさそうだ。

果たしてそこには仲本と入船先輩がいた。何やら変な格好をしている。前者は金髪ウェーブヘアのカツラにウチの学校ではない制服、後者は煌びやかなマジシャンのような格好。白いシルクハット付き。

「はい、文芸部の文集、文集は要りませんか。部員入魂の小説が5編も入ってたったの200円！ お買い得ですよー！」

派手なことをされていた。恥ずかしい。こっそりと後ろから声をかける。

「何やってんですか、あんたら」

「おー、榎本、お前もやるか？」

「やりません。何ですか、これ」

「出張販売だ！ 発行部数を去年と同じにしたからな。完売を目指すにはこうでもしないと」

「……いや、それは分かるんですけど、その格好は？」

「俺のは仲本のクラスで使ってたのを借りた。仲本のはさっきここでやってた劇のヤツだ」

「……いや、だからなんでそんな格好してるんですか」

「目立つ方がよく売れるだろ！」

「……」

推理というにはあまりにも馬鹿げた話だ。

消えた8冊は売れたというより持ち出したと考えるのが妥当。目的は勿論販売促進。シフトなのに部室にいない入船先輩が関わっているのは勿論だが、1人で突然そんなことを思いついて実行に移すとは考えにくい。ならばその前のシフトの仲本なら。交代のときに話し込んで、そのまま意気投合して出かけたのなら。この2人なら有り得る。そして文化祭で校舎以外に人が集まる場所といえば体育館だ。映画や演劇をやっている。

大いに論理性を欠く話だが、現実はこのまんだ。多分な。

結局、この御二人の活躍あつてか、文集は完売した。……これは喜ぶべきところなのだろうか。きつとそうだ、うん。

でも来年やれといわれても、俺は絶対やらないからな。

「おう、来たな」

俺の清掃班は3週に一度の休みの週だった。部室一番乗りかと思ったが、先客がいた。森田先輩だった。相変わらずどっかりと椅子に座り足を組んでいる。久しぶりにその姿を見た。何故なら、文化祭も終わって3年生は完全に受験モードに入っているからだ。

「勉強は、大丈夫なんですか」

「んなわけねーだろ。ヒイヒイ言ってるよ。でもたまには気晴らししないとな、参っちゃまう」

右手には尾崎の本棚の一冊。本棚の本は部室内でなら持ち主の許可を得ずとも自由に読むことができることになっている。

森田先輩は小説は書かない。ただ、あらゆるジャンルの本を読むその量と選り好みの無さは部室内の全ての本を把握しているということからも分かる。俺が入部したときも、最初に語る相手になってくれたのは先輩だった。

「大変ですか」

「まあな。程度は人によるかもしれないが、俺は頭よくないからな。記述はな、何とかなるんだ。でも問題は一次なんだよな。選択問題っていうのはどうも俺の性に合わないらしい。特に国語の読解なんか、選択肢が全部正しく見えてくるから困りもんだ」

「最初に自分で答えを書いて、選択肢から似てるのを選ぶっていうのはどうですか？」

「先生もそう言うんだけどな、これでなかなか上手くないんだ」「そういうもんですか」

「ま、否が応でも来年になりや分かるさ。って、別に受験勉強の愚痴を言いに来たわけじゃないんだがな」

手元の本に目を落とす。

「なあ、部長は誰にするか決まったか？」

「いえ、まだ確定はしていません。そろそろ決めないといけいないんですけど」

「そうか」

ページを繰る。丁度切りのいいところになったらしい。本をパタンと閉じると、俺に向き直った。

部長の仕事は、年度末で終わる。だがそれは書類の上での話で、実際は年明けにはもう仕事を移していく。2月の生徒総会には2人揃って前の席に座るし、部活の更新届けにも名前を書かなくちゃならない。だからそろそろ、次の部長を決めるべきなのだ。11月頃に決まるのが常だが、時期尚早というわけでもない。現に生物部のほうでは、カズがもう当たりをつけたらしい。

文芸部の1年は3人。そのうち馬越は殆ど辞めたに等しいから除外。榊か尾崎か、どちらか一方が部長でもう一方が副部長。そこまでは妥当なところだろう。だが、部長をどちらにすべきなのか。もう少し人数が多ければ、活動のうちに何となくリーダー的な素質が現れてくる人がいるかもしれない。でも榊も尾崎も、それには当てはまらなかった。かといって2人とも部長が務まりそうにないわけでもないし、頼めば断られはしなさそうでもあった。

……こういうことは、前例を参考にすべきだろう。俺は先輩に尋ねる。

「先輩の代は、どうやって決まったんですか？」

先輩はニヤリと笑った。

「気になるか、どうしてあんなヤツが部長になったのか」

はいと答えると入船先輩に失礼な気がしたので、曖昧な笑みで返答に代える。

確かに、改めて考えると不思議な気もする。どつしりと構えているのが部長だというのなら森田先輩が適任だろうし、明るさと行動力なら桜井先輩の方が上だろう。小説の腕なら霧山先輩が群を抜いている。それに比べて入船先輩は……何と言うか、変わっている。

みんなを先導する立場の人間として、選ばれるとはあまり思えない
いや、実際は上手くいっていたのだから、向いていないなどという
ことはなかったのだけれど。それでも、当然のようにそう決まった
のなら少し奇妙だ。

「俺らの代のときは、ちょっとゴタゴタしてな」

先輩はそう言って足を組み換えると、暮れかかった空に目をやった。

「元々入船は論外だった。あの体たらくだからな。実力で選ぶなら
霧山だったんだが、あいつはあんまり団体行動が得意じゃない。桜
井も打診されたんだが、頑なに拒んだらしい。肩書きつてのが苦手
なんだと。それで、俺にお鉢が回ってきたわけだ」

元副部長は俺に視線を戻す。

「俺が部長になってもよかった。いや、自然に行けばそうだったんだがな。でも何て言うか、変えたかったんだな、文芸部を。入って
半年ちよいでそう思うのも出すぎた真似かもしれないが、まあ、俺
が部長になったら変わらない気がした。別に当時の部活が気に食わ
なかったわけじゃない。先輩方も良くしてくれたし、活動も楽しか
った。でも何か、変えてみたかった。変えてやったという経験をし
てみたかったんだ。だったら俺が部長になって何か始めるより、全
然違うタイプのヤツが部長をやったほうがいいんじゃないかって思
った。それで入船に話を持ちかけた」

「入船先輩は……」

「承諾してくれたよ。二つ返事とまではいかなかったが。で、ちょ
っと色々悶着があつてな。先輩方は純文学系統の人たちばかりだ
ったから、そりゃあ抵抗もあったんだろうな。でもまあ、結局は承
認された。実際、あいつはよくやってくれたと思うよ。俺の助けは
あまり必要なかった。ブレーキをかける必要はあつたけどな」

そう言って苦笑する。だが、それは沈痛な面持ちに一転する。

「でも……どうだったんだろうな。時々思うんだ、俺の判断は正し
かったのか、ってな。新入部員はお前ら4人だった。いや別に多け

れば多いほいってわけじゃないんだが、もし俺が部長をやっていたら、もつと入ってきたのかもしれないと思うときがある。大変だっただろ、お前らも文化祭の仕事が多くて」

「……」

否定はできない。原稿を書く人を決める際も、誰かが書かなくてはいけないという重圧があったし、仲本も文化祭前は随分遅くまで残っていたようだ。人数が多ければ原稿集めも文集作成も随分楽になっただろう。

一年半前の、入船先輩の派手なパフォーマンスを思い出す。あれが入部希望者の数に影響しなかったと断言することはできない。でも。

それは決して、つまらないものではなかった。苦情を言いたいなどということはない。大変ではあれ、充実した楽しいものだった。

「俺は前の文芸部がどうだったのかは知りません。でも、これだけは言えます。俺は今の文芸部が好きです。ここに入って、先輩達に会えて、良かったと思ってます」

「……そう言ってもらえると、助かるよ」

先輩が深く息を吐くのが聞こえた。

さて、話はここで終わらない。他でもない、俺の代のことだ。

「なら、どうして俺が部長になったんですか」

そう言ったところで、ドアの開く音がした。見ると中本がいつも通りニコニコしながら入ってくる。

「わー、わー、森田先輩がいるー。会うの久しぶりだー。珍しいー」

「人を天然記念物みたいに言うな」

その後ろには尾崎と榊も。どうやら掃除が終わったらしい。こうなると少し話にくいな。

先輩は首を戻して言う。

「ま、お前が一番真面目そうだったから、かな」

「でも先輩はそういうのは嫌だったんじゃないんですか？」

「別に嫌ってわけじゃねーよ。それに、色物が2年続くつてのもどうかと思つてな。入船は俺が抑えられたから何とかなつたけど、お前らは別に古くからの知り合いってわけでもないし、何より異性だ。お前にブレーキ役を任せるのも大変だろう」

仲本が部長になつた所を想像する。仲本が暴走したとしたら、俺は森田先輩みたいに仲本に跳び蹴りを食らわせて止めたり出来るだろうか。

……無理だな。

「そうかも、しれません」

「むむむー、なにやら私の悪口を言われている気がするんですけどー」

割り込んでくる仲本。まあ本棚の近くで話しているから耳に入るのは当然だ。

「そんなんじゃないよ。お前と入船が似てるって話だ」

「んー、嬉しいような気色悪いような……」

「気色悪いって……」

先輩は1年の2人をちらりと見やり、俺の肩を叩いて小声で言う。

「ま、どっちもクセは強くないし、どっちになつても大丈夫だよ。

あんまり深く考えるな」

いつも通りの活動を終え、俺は帰り支度をしていた。

森田先輩は尾崎としばらく歓談した後、図書室で勉強するといつて出て行つた。それを聞いて俺は、ああもう図書室が3年でこつた返す時期かともうでもいいことを思った。

ウチの高校の図書室は随分夜遅くまで開いている。静かだし気が散るものも無いしそこそ広い。少し埃っぽいことと少し暖房が効きすぎていることを除けば勉強するにはいい場所なのかもしれない。俺も1年後にはそこに詰めるようになるのだろうか。仲本も、竹内も、カズも。さすがに塾とかに行つてるヤツはその自習室を使えばいいんだろうが。一学年を丸々収められるほどのスペースは無い

しな。

「お疲れ様でーす」

「お疲れ様です」

1年2人が出て行き、俺も帰るかと言を手にする。

ふと見ると、仲本は本棚の前で何かじっと考えているようだった。

「どうした、もう鍵閉めるぞ。探し物か？」

「……あー、えーと、うーん」

仲本らしくない曖昧な返事。前にもこんなことがあったような気がする。

「何だよ」

「んつと、ちょっと訊きたいことが」

「？」

「……さっきさ、先輩と、次の部長のことについて、話してたんだよね？」

「ああ、そうだけど」

「……決まったの？」

「いや、まだ」

「……そっか」

「どうしたんだよ」

どうも歯切れが悪い。困ったような笑顔を向けてくる。

「あのね、私は尾崎君がいいと思うの」

「奇遇だな。俺もだ」

「そう。ならいいんだけど……」

その言い方に俺は違和感を覚える。「尾崎がいい」と「尾崎ならいい」は違う。「がいい」？ 尾崎「がいい」？ それはすなわち、「榊ではダメだ」ということか？

「どういうことだよ」

「ん？ いや、別に、どうってことはないんだけど。あ、ほら、歴代の部長さんってみんな小説書ける人じゃない。尾崎君もこの前書いてたし、だからそのほうがいいかなーって……」

……

まあ、いいか。多分深く考えすぎだ。言い間違いだろう。仲本も副部長だし、色々考えることはあるんだろう。

「うん、じゃあ、帰る帰る。ごめんね、時間とらせちゃって。彼女さんが待つてるよ」

「3分も経ってないって。気にすんなよ」

「……うん」

連れ立って部屋を出る。なにやら様子がおかしい。そういえば先月だったか、仲本が俺に変なことを言ってきたのは。これはもしかしてあれか。女子は生理のときに情緒不安定になるとかそういうやつか。ちょうど1ヶ月前のことだし、否定はできないな。推理というには程遠い、単なる空想だが。

だが俺の行く手はまたしても阻まれることになる。いや、仲本は阻んだわけじゃないから、またと言うのはおかしいか。

仲本と別れて彼女の教室に向かおうとしたところで、そいつは声をかけてきた。

「いかんねー、百合花ちゃん以外の女の子と仲良く歩いちゃって。

浮気はダメだよ？」

「……いや、あいつは副部長だし。話があるのは当然だろ」

「ま、それくらいしってるけど」

「だったら言うな」

「冗談だつて」

カズはのんびりと廊下に佇んでいた。俺たちが渡り廊下を歩いているところを窓越しに見たのだろう。

「で、何の用だ」

「用が無きゃ話しかけちゃいけないの？ つれないなー、私とえのうちの仲じゃなか」

「気色悪いことを言うな。わざわざこんなところで待ってるって事は、用があるんだろ」

「ん、まーね」

よつこらせ、ともたれていた背中を壁から離す。

「部長、決まった？」

「……お前もその話かよ」

「尾崎君？」

「文句あるかよ」

「別に。他の部活のことにいちいち口出しするつもりはないよ」

「なら訊くな」

「そうもいかない。個人的な問題が混ざりこんでるからね」

「……」

「尾崎君が部長になること自体は何の問題も無い。問題は、その理由だよ」

また。

またその話か。

どうしてこういうときに限って誰も通じかからないんだ。廊下がやけに静かだ。

「2月の生徒総会。尾崎君はえのっちと一緒に前に出るんだよね？ その時にまた部室の話が出たらどうするの？ いいの？ 尾崎君を当事者として巻き込んでやって」

「……その頃にはもう部室は決定している。その期に及んで覆るなんてことはない」

「本当にそうかな？ 相応の理由があつて、全校生徒が賛同するなら、ありえるんじゃないかな」

「……また、マイクの前に立つつもりか」

「いやいや、私も馬鹿じゃないからね。同じ真似して同じ失敗するなんてことはやらないよ」

「だったら……何をするつもりなんだよ」
「背筋がぞわりとする。」

「コイツは……今度は、どうするんだ？ 何を考えているんだ？ もう同じ手は通用しないということか？ どうしたら……」

「もう一度言うよ。えのつちのやっていることは、尾崎君のためにはならない。むしろ逆効果だよ」

「お前に何が分かるんだよ」

「分かるよ、私にだってそれくらい」

俺はカズを睨みつける。カズも同じ視線を返してきた。

数瞬の膠着状態。それはカズが頬を緩めたことで終わりを迎える。「まあいいや。多分分かって言っても無理なんだよね。えのつちには周りが見えてない。だから、いいよ。うん分かった。じゃあ尾崎君が部長ってことで、話はつけておくから。じゃあね」

言い終わるや否や、カズは踵を返す。

話をつける？ 誰に？ 何を？

だがそれを口に出す前に、カズは姿を消してしまった。

残された俺は、脇の壁を拳で叩いた。

「くっそ……」

これで部長を榊に変更すれば、恐らくカズの計画は狂う。でもそんなことはできなかった。俺は尾崎を部長にしたかった。社会科講義室を尾崎の居場所にするために。

どうしてここまで俺が尾崎に固執するのか、俺は分かっている。

癪だが、カズも分かっているのだろう。

尾崎は俺に似ているのだ。3年前の俺に。

「それにしても……寂しくなっちゃったねー……」

机を囲むのは5人。その顔を見渡して、桜井先輩は呟く。久しぶりに後輩の顔を見に来たらしい。折角なのでミーティングに参加してもらったことにした。

「榎本、部室は来年もここ？」

「あ、はい。そのつもりです」

「ならすっかり新入生集めないとね。こんなガランドウじゃ、閑古鳥が鳴いちゃうよ。しっかりやりなよ」

「……荷が重いです」

「あはは、まあ豊作の年もあれば不作の年もあるよ。そんな気負わない。まあやれるだけやれてこった。……で、今日の議題は？」

「……そろそろ、次期部長を決めようかと」

心なしか部員達の顔に緊張が走る。俺は1年2人を見やる。話し合っておくようにと、前もって言うておいたのだ。

「で、どっちが部長になるか決まったか？」

「……いえ、先輩方に一任しようということになりました」
榊が答える。

「そうか。なら……」

視線を仲本に送ると、仲本は頷きで返答に代える。

俺は宣言した。

「部長は尾崎。頼んだぞ」

それは、同時に自分への言い聞かせでもあり、カズへの宣戦布告でもあった。

8・October（後書き）

随分と間が空いてしまいました。

にもかかわらずこんなグチャグチャですみません……

久しぶりに書いたら設定を忘れていたというこの不甲斐無さ。

9・November

「さすがに最近、冷えてきましたね」

昼休みの中庭で、弁当の箸を置いて彼女は呟いた。

「そうだな。そろそろ、外で食べるのはつらいかもしれない」

そう答え、空を見上げる。どんよりとした灰色の雲が広がっていた。雪が降るのはまだ当分先のことだろうが、近いうちに防寒具は必要になるだろう。

俺と彼女が昼に一緒に弁当を食べるのは、晴れの日だけだった。

雨の日は待ち合わせ場所で弁当を受け取り、そこで二言三言を交わして別れた。教室で食べると冷やかされそうだったので、部室で食べることにしていた。それでも昼休みに部室に来る部員もちらほらおり、それが彼女のことを知っている者だとその時はその時で冷やかされはしたのだが。だから——冷やかされるのが嫌だからではなく、彼女と一緒に昼飯を食べられないから——俺は雨の日は朝から気分が沈んでいた。梅雨の時期なんかは雨雲や天気予報土にやり場の無い怒りをぶつけていた。まあ、昼が駄目でも一緒に下校することとはできたから、彼女と話す機会がめっきり減ったというわけでもないのだが。

さて、雨の日に一緒に弁当が食べられなかったのは、屋内に2人で静かに時を過ごせる場所が見つからなかったからである。まあ勿論そんなプライベートスペースを公共の場である学校に見出せるはずもなく。しかしそうなると冬はどうすればいいのだろうか。さすがに手袋やマフラーをつけて弁当を食べるのもどうかと思うし、それでも寒い中に彼女を連れ出すのも気が引ける。何て言っただって、彼女は寒い冬の日でも素足のスカートなのだ。中学の時も思ったが、どうして女子というのはあんな寒い中、あんな寒そうな格好でいられるのだろうか。一度彼女に訊いてみたところ、「気合で何とかするんです」とのこと。気力ってすごいな。

というわけで、このままでは冬の間は梅雨の時期のように毎日別々に昼を過ごすことになる。しかも梅雨は一ヶ月弱で終わるが、冬はそうはいかない。下手すると今年度はもう一緒に弁当を食べることはできないということになる。それはどうなんだ。どうなんだって、それが普通だと言われると何とも言い返しようが無いのだが。「何かいい場所はないものかね」

「私は、先輩さえ良ければ外でも構わないんですけど」

「いや、それはまずいって。風邪でもひかせたりなんかしたら、申し訳が立たない」

「でも……」

「まあ、しばらくの辛抱さ。それに、絶対に無理というわけでもない。冬もたまには暖かい日もあるさ。どうせ毎日弁当を頂きに一瞬は会うわけだし、その時日和が良さそうだったら外で食べればいいだろ？」

「……そうですね」

俺もあまり気は進まないが、かといって教室や部室で食べて皆の顰蹙を買うのもどうかと思うのだ。やれやれ、校内恋愛というものもなかなか難しい。

「その代わり、休日会うことにしないか。昼に話せない分、今まよりも」

「分かりました。じゃあ、できるだけ空けておきます」

「うん、俺もできるだけ誘うようにする」

きっと1年後は大学受験でそれも叶わないことになるのかもしれないが。だったら今のうちに、いい場所を探しておく必要があるのかもしれない。雨だろうが冬だろうと一緒に昼を過ごせる静かな場所。丹木高校は進学校だ。きっと来年の今頃の俺は、模試や勉強漬けになり、帰りも夜遅く、それくらいしか気の休まる時が無いだろうから。

……まあ、それも1年経っても俺と彼女が付き合っていればの話なのだが。

それから半月ほどが経った。さすがに外で食事をするには寒くなり、当初の予定通り、俺は部室で一人寂しい昼休みを過ごしていた。「ややや、榎本君、今日もここかな。彼女さんと喧嘩でもしたのかな？」

来た、冷やかしの部員筆頭、仲本望美。

「分かってるくせに。外が寒いから一緒に食えないんだよ」

「いいじゃん堂々と屋内で食べれば」

「恥ずかしすぎるわ」

「それくらいの度胸が無いと社会に出てからやっていけないぞ！」
どんな社会に出るんだ俺は。

仲本はよつこらしよとわざとらしい掛け声と共に近くの机に座る。時間帯からして既に昼は済ませたのだろう。それにしても最近昼に仲本とよく会う。よく部室に来ているのだろうか。梅雨の時もよく居合わせたものだが、その時は仲本は文集の仕事をしていたから大変だろうなと思うくらいで特に気には留めなかった。今は仕事は無いはずだ。一応訊いてみる。

「なんか最近よく会うな」

「同じ部活なんだから当たり前じゃん」

「いや、昼休みにさ」

「榎本君が昼に来るようになったからでしょ？」

「まあそうなんだが……仲本はよくここに来てるのか？」

「ん……まあたまーにね」

「たまについていう以上の頻度の気がするが」

「まあ偶然だよ偶然」

そうだろうか。まあいい。

「今日は尾崎君は来ないみたいだね」

仲本は話題を変える。俺は僅かに顔をしかめた。

尾崎もまた、昼の部室によく来る部員の1人だった。ただ、その理由は分かっている。教室に居場所が無いのだ。彼女の情報によれ

ば、どうやら同じクラスに幼馴染がいて、いくらかは話し相手になつてくれているようだったが、常に一緒というわけにもいくまい。彼にも友達付き合いというものがあるだろう。だから、尾崎はここに来る。そのことは仲本も知っているはずだ。

「どうすれば……いいんだろうな」

「……尾崎君？」

「ああ」

「私たちには対症療法くらいしかできないよね。尾崎君が少しでもここで気安くいられるようにするくらい。学年の壁は大きいからね、原因をどうにかするのは難しい」

「そうなんだよな……」

俺が立ち入ったところで尾崎の状況は改善しないだろう。むしろ、先輩を味方につけてと余計疎ましがられるだけだ。噂は強力だ。俺たちに状況を打開する術は無い。俺が出来たのは、この部室を守つた、尾崎の居場所を作つた、それだけだ。

それだけでいいのか？ 俺は自問する。しかし答えは返つてこない。尾崎を助けてやりたいのに。救い出してやりたいのに。俺にはこれ以上できることは無いのだろうか。

重い空気が流れる。仲本は慌てて、わざとらしく明るく言った。

「さてさて、碧空の準備もしないとね！ 何て書こうか今から考えとかなくちゃ。榎本君はまた小説書くのかな？」

小説を書くならともかく、メッセーシだけなら今から考えちゃ早すぎるよ、仲本。まだあと3ヶ月ある。

でも、そんなものかもしれないな。

時間なんて、気がつけばあっという間に過ぎているものだから。

その日の夕方だった。いつも通り部活が何となく終わる。気づいてみればいつも部室に来るメンバーはたったの4人になっていた。俺と仲本と、榎と尾崎。3年の先輩方は受験勉強に忙しく、ほとんど訪れることはなくなった。寂しくなったものだ、と溜息を吐く。

1年前は、もつと大勢が賑やかにしていたというのに。1年後の俺も、ここに来ることはほとんどなくなっているのだろう。1年先のことなんて、とてつもなく遠い未来のように思えるが、1年前のこととはつい最近のように思う。彼女が入学したのも、彼女に告白して付き合い始めたのも、俺がこの教室に始めて足を踏み入れたのも、俺が丹木高校に入学したのも、受験したのも、彼女やカズに出会ったのも、そして……俺が居場所を見失っていたのも。

「お疲れ様です」

尾崎が鞆を担ぎ上げて朗らかに言う。本当は苦しいだろうに、いや、ここにいるのが本当に楽しいのなら、それはそれでいいのだが。

「お疲れ」

「お疲れさん」

「また明日ー」

めいめいが別れを告げ、3人になる。と、榊が話しかけてきた。

「先輩、この前の本、すごく面白かったです」

前回の読書会の選定で俺が推薦した本のことだった。結局採用はされなかったが、榊は興味を示してくれたので、本を貸していたのだ。

「そうか、それはよかった」

「あの読んでて冷や汗が出てくる感じがいいですよー。気に入ったんでシリーズ全部まとめ買いしちゃいました」

「まじでか。分かる分かる、あのラストの展開にはゾクツとくるよなあ」

嬉しくなった俺は小説の気に入ったシーンをいくつか挙げた。榊もニコニコとそれに賛同する。

しばらく語らいを続けるうち、ふと榊が脇に目をやった。その先には黙って椅子に座り、所在無く視線を彷徨わせている仲本がいた。「どうしたんですか、仲本先輩。何してるんですか？」

「……ん、いや、何となくね」

そわそわする仲本。なにやら挙動不審だ。

「何か用事でもあるんですか？」

「いや、そういうわけでもないんだけど」

「部活も終わりですし、そろそろ下校時刻ですよ」

「それは榎本君や野乃ちゃんも同じじゃん」

「私ももうすぐ帰りますけど。もう少しだけ話をしてから」

「そっ、か」

「……帰らないんですか？」

「うーん、帰ったほうがいいかなあ」

……何だ？

さすがの俺も違和感を感じ始めていた。何かがおかしい。何も用が無いのに帰らない仲本は勿論だが、それに対する榎の態度も。普段の榎はこんなことは言わない。こんなつつけんどんな態度は取らない。まるで、暗に仲本に帰れと言っているようじゃないか。

仲本は困り笑いでしばし逡巡し、意を決したように言った。

「うん、じゃあ帰るよ。そのほうがいいよね？」

「……先輩のお好きなように」

「うん、じゃあね、2人とも」

そう言って席を立つ。去り際に呟いた一言が、何故かよく俺には聞こえた。

「……いつまでも、先延ばしにするわけにはいかないもんね」

扉が閉まる。仲本の足音が遠ざかっていく。やがて完全に聞こえなくなるまで、俺たちは無言だった。

「どうしたんだよ。なんか変だったぞ、今のお前」

沈黙を破ってみたが、榎は答えなかった。俯いていて、窓に腰掛けている俺からは表情は読めない。

「……先輩」

しばらくしてようやく声を発する。だがそれは、いつもの榎らしくない声だった。快活で、それでいてゆったりとしていて、甘えるのが上手で、そんな声じゃなかった。別人のような、搾り出すよう

な、震えた声だった。

「先輩って、付き合ってる人、いるんですよね？」

「……ああ」

「上手く、いつてるんですか？」

「まあ、多分な」

前に仲本に同じようなことを訊かれたな、と思いながら答える。しかし榊も世間一般の女子同様、人の色恋沙汰に興味があるのか。今までそんな話を榊の口から聞いたことがなかったから、少し驚きだった。

「本当に？」

つかつかと榊が歩み寄る。僅かに見えた顔は、眉をひそめ、泣き出しそうだった。

「……どういう意味だよ」

「私、何度か見ました。先輩と女の人と一緒にいるの。一緒に下校している所とか、お昼ご飯を食べている所とか、並んで廊下を歩いている所とか。夏休みに学外で見かけたことも一度だけありました。文化祭のときも、一緒にいましたよね」

榊が顔を上げる。キツと俺を睨みつける。

「でも、いつ見ても、私の抱いた印象は同じでした。ヘンテコだなんて。ギクシャクしてるなって。だって……だって、あの女の人、全然笑っていませんもん。笑ってるの、見たことない」

言葉が胸に突き刺さる。それは俺も感じていた。付き合ってから今まで、俺は彼女の笑顔というものを見たことがない。いや、そもそも出会ってから今まで見たことがない。だから俺は笑顔が見たいと思った。この人が笑ったらどんな表情をするんだろうと。それが、彼女に告白した理由の1つだった。彼女を笑わせたかった。だが、彼女は一向に笑顔を見せてくれなかった。そのことに悩みもした。でも、彼女は楽しいと言ってくれた。何かと提案してくれるし、協力してくれる。嫌がる素振りも見せたことがない。だから俺は楽しいというその言葉を信じて、今までやってきたんだ。俺は彼女を幸

せにできると言い聞かせて。

なのに。

「それで先輩が、一生懸命話しかけてる、そんな感じ。そんな、変な関係。おかしいですよ。あの人は全然笑わなくて、先輩ばかりが笑って、おかしい」

「そんなこと……」

「先輩」

榊は笑った。泣き笑いだった。

そして。

「私に、乗り換えませんか？」

そう言った。

「……え？」

「好きなんです、先輩のこと、ずっと。部活動紹介の時にいい人だ
なっと思って、実際に話してみたらそのとおりの人で。優しく、
かつこよくて、リーダーシップがあって、でもどこことなく抜けてい
て、どこことなく影があって、私の理想の人なんです。彼女がいるっ
て聞いても、諦められなかった。私、本当に、先輩のこと、好きな
んです」

俺はやつと理解した。なぜ仲本があんなことを言ったのか、やつ
と理解した。

文化祭の時、仲本は言った。もっと彼女と付き合っていることを
強調した方がいいと。それは榊に諦めさせるためだったのだ。もっ
とおおっぴらに見せ付ければよかった。でも俺は羞恥心から、それ
ができずにいた。俺と彼女の中がはつきりしないから、榊はこんな
ことを言う。

部長をどちらにするか悩んでいたとき、仲本は言った。尾崎にす
べきだと。それは榊と俺を近づけないためだったのだ。部長の引継
ぎの際は2人で話し合わなければいけないことが色々ある。その
後もサポートが必要になることも何度かあるだろう。それは彼女の
心をますます駆り立てることになるし、振り振られたあとなら気ま

ずくなるだろう。だから榊を部長にしまいとしたのだ。

そして今日の昼休み、仲本は言った。俺が仲本とよく合うようになったのは俺が昼にここに来るようになったからだ。それは元々仲本がここによく来ていて、俺が割り込んだという意味じゃない。仲本だって昼休みにここには滅多に来なかった。俺が彼女と昼を食べないでここに来るようになったから、仲本も来るようになったのだ。榊が昼休みに部室にやってくるかもしれないと思って。俺が榊と2人きりになることを恐れて。だからさっきも帰ろうとしなかったし、榊は仲本を帰そうとした。

仲本は、知っていたのだ。榊が俺を想っていることを。気づけなかったのは、俺の責任だ。

「どうしても……駄目なんですか……？」

「……悪いな」

「本当に、あの人のこと、好きなんですか？」

「好きさ」

「嘘」

「嘘じゃない」

「嘘！」

叫びが部屋に響き渡る。びりびりと窓ガラスが振動した気がした。「そんなわけないですよ！ あんな関係で、一方通行の、偏った、変な関係で、好きでい続けられるはずがないですよ！」

「そんなことはない」

「何で……何で……！」

榊は踵を返す。肩が震えていた。

「すみません、私、退部します」

「……」

「酷いこと言ってるって、分かってます。勝手なことしてるって、分かってます。でも、耐えられないんです。先輩を見てると、悔しくて仕方ないんです」

「……落ち着け。よく考えて——」

「考えてますよ。冷静ですよ。前から思ってたんです。文化祭のときから、ずっと。もっと前からかもしれない。先輩が付き合ってるって知って、その相手を見てから、ずっと。何度も自分に言い聞かせました。頭を冷やしました。でも駄目なんです。本当に、本当に……」

俺は諦めた。榊が辞めたら1年の部員は尾崎だけになる。それは文芸部としては大きな痛手だ。でも、これはそういう問題じゃない。部活の問題じゃない、人間関係の問題だ。そして榊をここまで追い詰めてしまったのは俺だ。だったら。

「……分かった。部員には俺から言っておく。……すまん」

「……どうして怒らないんですか」

「……」

榊は振り返る。怒ったような表情で、でも目尻に涙を浮かべて。

「私は酷い女です。先輩に迫って、彼女の悪口を言って、出過ぎた口を利いて、勝手なこと喚いて。今の私の言葉だって、殆ど脅しじゃないですか。私は先輩が築き上げてきたものを滅茶苦茶にしようとしてる。なのに！ どうして！ 先輩は私を怒ろうとしないんですか！ 軽蔑しないんですか！ 謝るんですか！ いつだってそうです。先輩は、何だって許してしまう。妙に優しく、変なところで生真面目で。尾崎君のことだって、入船先輩のことだって、今の私のことだって。だから……だからっ、私は先輩が好きで、だからこそっ、認められない！ 先輩、先輩は本当に、あの人のことが、好きなんですか？ 本当は、とくに、飽きてるんじゃないですか？ 拒絶が出来ないばかりに、ずるずると、情性で、付き合ってるだけなんじゃないですか？ 楽しくなんてないのに、振り回されてばかりなのに——」

乾いた音が彼女の言葉を遮った。

頬に手を当てる榊を見て、俺が平手打ちを食らわせたのだと気づく。それ以上聞きたくなかったのだ。無意識のうちに、彼女の言葉を聞くことを、「拒絶」した。榊の言葉は、俺の心をこれでもかと

言わんばかりに揺さぶった。考えたくなかったことを突きつけた。彼女に飽きている？ 惰性で付き合っている？ 違う。そんな訳は無い。むしろ逆だ。俺のことを、彼女は、どう思っているのだろう。彼女が笑ってくれないのは、俺の責任だ。俺が彼女を楽しませられないから。なのに、彼女は未だに俺と付き合っている。それは惰性ではないだろうか。何となく俺の告白を受け入れて、何となくデートに誘って、何となく一緒に過ごして。恋人の気分を味わおうと并々まで作って。

1. Introduction

「叩いた……」

柗は笑っていた。涙をぼろぼろとこぼしながら、笑っていた。俺は、動けなかった。

榊の目に映る俺は、拒絶をしない人間だった。その俺が、榊の中で初めて、拒絶したのだ。初めて拒絶した相手が、榊自身だったのだ。それがどういふ感情なのか、俺には分からない。分かりようがない。でも少なくとも、それは純然たるプラスでは決してなくて、その責任は確実に俺にあった。

風にあおられた落ち葉が、窓ガラスを叩く。それを合図に、俺は腕に力を込めた。思いつきり振り回して、机に叩きつける。鈍い音がし、ゆっくりと痛みが脳に伝わる。呪縛から解放された俺は、廊下に駆け出した。人の殆どいない校舎に、足音が響く。彼女は教室か生徒会室か図書室にいるはずだった。俺は自分の教室にすら寄らず、玄関に向かい、校門を出、胸ポケットの定期券だけを手に、バスに飛び乗った。

家に帰って携帯を見ると、彼女からメールが来ていた。題名は無かった。

中身も見ずにゴミ箱へ捨てた。

9・November（後書き）

最早日が開いてしまったとかそういうレベルじゃないですね！
相変わらずグチャグチャですみません。迷走はしていないつもりな
のですが、余計なシーンとか足りない描写とかたくさんあります。

「……誰だ？」

放課後、部室に入って早々、俺はそう言った。本棚の前に、見知らぬ人影があったのだ。

「す、すみません！ ちょっと用事があつて……」

その相手はあたふたと手にしていた本を本棚に戻す。男だった。靴紐の色からして、1年生だ。どこことなく自信無さげな、でも利発そうな少年だった。

「もしかして入部希望者？」

僅かな期待を込めて、俺は訊いた。しかし少年は気まずそうに俯く。

「いえ、そういうわけでは……」

「……なんだ、違うのか」

「すみません、勝手に部室に入ったりして」

「……まあ構わないが、部の持ち物を勝手に触るのは感心しないな。部員の誰かから許可は取ったのか？」

そう尋ねると、少年は一拍おいて意外な言葉を口にした。

「えと、はい、吉沢一穂先輩から」

「……は？ カズ？」

俺は面食らう。この少年はカズの手先だというのか？ 何の目的で？

そこで俺は思い出す。カズが依然、俺にこの部屋を明け渡させるために別の方法を考えると云っていたのを。これが、作戦なのか……？

「……あの野郎、また勝手なことを……」

「あ、えと、すみません、ダメでした？」

申し訳なさそうに訊いてくる。おどおどとした態度が妙に癪に障るが、同時に可哀想にもなってくる。どうせ彼もまたカズに使われ

ているだけなのだ。この少年に罪は無い。まあいいさ、何をするのか、お手並み拝見といこうじゃないか。

「……いや、まあ、いいさ。あいつと知り合いなら、まあ」

そう言う、彼はホツとしたようだった。俺が手近な椅子に腰掛けると、彼も俺の前に来て座る。

「それで、文芸部部長の榎本先輩に用があつてきたんですけど……あなたですか？」

「ああ、そうだ。俺がここの部長だ。ん？　なんか用事でもあつたのか？」

「あ、はい、ちょっと訊きたいことが……」

「訊きたいこと？　まあ、どうぞ」

「実は、」

彼はそこでいったん言葉を区切り、数瞬の後、思い切つたように吐き出した。

「文芸部がここを部室として使っている理由についてなんですが」

「……またその話か……」

俺は呆れたようにそう呟いていた。

これでもう疑いの余地は無い。彼は、この部屋を取り上げるためにカズが送り込んできたのだ。だが、随分と直球だ。いや、後輩を使うという回りくどい手ではあるが、しかし。

「あ、すみません。話しにくいことだったりしますか？」

「あ、いや、いいんだ」

俺は薄く笑う。それが自嘲か、空元気かは分からない。

「やったのは俺だからな。予想はできたことなんだ」

そう。尾崎の居場所を守ると決めたときから、カズから宣戦布告を受けたときから。こうなることは分かっていて。俺が何とかしなければいけないんだ。

そして俺は話し始めた。以前は大勢の部員がいたこと。この部屋は文芸部の部屋として正当な理由があつたこと。俺が部長になつた

とき、1年が入ることを願って部室の変更をしなかったこと。それらをごく簡潔に。尾崎の話はしなかった。言うべきではないし、言う必要も無いと判断した。

「——結果は知っての通りだ。入ってきた1年は……実質1人だな。……時代の流れてヤツなのかね……」

俺はそう締めくくる。

馬越が来なくなり、榊が退部し、尾崎1人が残された。榊の退部についても、とやかく言う人はいなかった。もう3年生はほとんど来ないし、事情を察しているらしい仲本も「そっか」と言うだけだった。尾崎は驚いていたようだったが、追求するようなことはなかった。

3年が卒業すれば、文芸部は実質たった3人になる。俺と仲本と尾崎。それだけで、一体どうなるのだろう。

「……この部屋は、これから使い続けるつもりですか？」

彼はそう尋ねる。

「来年はどうするか？」

「はい」

「……さあね。あいつに任せるよ」

嘘だった。変えないつもりなのは、既に決めてあることなのだ。それはカズも知っているはずだ。尾崎がこの学校にいる間は、この部屋を尾崎のために残してやりたい。そのために俺は生徒総会を戦い、今もこうして間接的にカズと対峙している。

でも、それでいいのか？ ふと、そんな思いが頭をよぎる。尾崎が心を許せる場所を守る。それは立派なことだ。だが、それはえらく消極的ではないか。根本的な解決策にはなっていない。それで俺は尾崎を助けることになっているのだろうか。

「逃げなのかもしれないけど……でも……」

「え？」

「……いや、こっちの話」

そつだ。何を言ってるんだ。俺にできることはこれくらいしかな

いつて、分かっているじゃないか。

反抗期の頃、俺は親の言葉に対して、いつも思っていた。大人のくせに、子どもの気持ちなんて判らないくせに、知ったような口を利くなと。今も同じだ。俺は2年で尾崎は1年。たった1歳の差だけれど、学年の違いは大きい。俺が何を言ったところで、1年生の目には尾崎が先輩に庇われているようにしか見えない。それじゃあ駄目なんだ。対等な関係の人間にしか、積極的な解決は出来ない。尾崎に向けられる目を変えることはできない。俺にできることは、これくらいしかないんだ。

言い訳のように、俺は付け足した。

「来年も駄目だったら、変えざるをえないだろうけどな」

「ありがとうございます、大体分かりました」

そう言って少年は深々と頭を下げた。俺は拍子抜けした。てつきり、何か反発を受けるかと思っていたからだ。

「用はそれだけか？」

俺がそう問うと、彼は僅かに眉をひそめた。

「そのつもりだったんですが……少し気になることが」
「気になること？」

「この本なんですけど」

彼は本を取り出す。見ると、それは尾崎の棚にある本だった。さつき取り出してずつと持っていたらしい。

「この本が入っている棚の本は、全部尾崎君のものですか？」
意図を掴みかねる。

「その棚？ ああ、あいつの持ち物だ」

「さっきいくつか軽く読ませてもらいました。勘違いだったら悪いんですけど、みんな同じ傾向の本じゃないですか？ いや、ジャンルは色々なんですけど、ストーリーの流れというか」

俺は驚いた。確かに、尾崎の持ってくる本には共通点があった。一見しては気づかない。作者も国内外問わず、ジャンルも怪奇小説

からファンタジー、青春物語と幅広い。だが、ストーリーの軸、もしくはその結末は同じだった。

家族の絆を扱った物語。そして最後はみんな仲良くハッピーエンド。それに気づいたとき、俺は笑ったものだ。よくもこれだけ集めてこれたと。

しかし、彼は文芸部員ではない。この本など、ほとんど読んでいないはずだ。いくつか軽く読んだとは言ったが、尾崎の本は数十に上る。とても短時間で読みきれたものではない。ということは、ここにあるほとんどの本を、彼は読んだことがあるということだ。
「……ハハハ、確かに。偏ってるよな。それが分かるってことは、結構君も……」

読書家ということだ。それも、かなりのの。

「どうだ？　ウチに入らないか？」

冗談交じりにそう言ったが、彼は狼狽した。

「あ、えと、その、僕は……」

「……いや、無理にとは言わないさ。悪かった」

確かに部員が少なくて困ってはいるが、無理矢理引き込むわけにもいくまい。それに、恐らく彼はカズの後輩、ということは生物部なのだろう。兼部するとなると彼も大変だし、何より俺も面倒なことになるだろう。

「……それで、この本なんですけど」

再び彼はそう言つと、終盤のページを広げて見せた。

「……え？　それがどうかしたか？」

「ところどころ、皺が寄ってますよね。円形に。これって、濡れた跡ですよ？」

見ると、確かにページの上のほうに、水を一滴垂らして乾かしたように丸い皺がある。彼はページを繰る。他の紙にも、それは散見された。

「……ああ、確かに濡れた跡だ。よく気付いたな、こんなもの」
俺がそう答えると、彼は俯いて唇を噛んだ。寂しそうな表情をし

ていた。親友がひた隠しにしてきた秘密を何かの偶然で知ってしまったときのような、申し訳なさそうな表情だった。

「……どうか、したのか？」

声をかけるとはつとしたように顔を上げ、慌てて本を閉じる。

「すみません、用は済みました。ありがとうございます」

そう言って立ち上がった。

「あ、すみません、最後にやっぱりもう一つだけ」

扉に手をかけようとして、彼は振り返った。なんとも言葉に一貫性の無いやつだ。

「先輩は尾崎君の噂、知ってますか？」

「……ああ」

馬鹿馬鹿しい話だ。尾崎は父親の権力を行使できるから、齒向かうとろくなことになるかという。

「正気を疑うね。そんなのを広めるやつも、信じるやつも」

俺はそう言って笑った。だが彼はさらに口を開く。

「尾崎君が部室をここにしたという話もですか？」

「え？」

「尾崎君が部長に決まったのも、尾崎君がそうなるように仕向けたとのことでしたか」

「はあ!？」

俺は驚いた。驚きのあまり、否定する言葉すら出ない。だってそうだろう？　あまりにも馬鹿げている。それじゃあまるで独裁者だ。そんなことを信じるやつが、本当にこの学校にいるというのか？　しかし、もしそうだというのなら……

「でも、それはデマでしたね。ここは元々文芸部の部室だったし、尾崎君が部長になったのは1年生が1人だったから必然だった。それだけのことですね」

彼はそう言って笑って見せた。だが、俺は言葉を返せなかった。その解釈には若干間違いがある。俺が尾崎を部長に選んだとき、

榊はまだ部に在籍していた。だから尾崎が部長になったのは必然ではないのだ。それは俺が決めたことだ。部室だって、俺がわがまを言っただけのままにしてもらったことだった。それらが、俺のつた行動が、尾崎を苦しめていたなんて。

俺は呆然とした。彼は逃げるように去っていった。

「……どうしたの、榊本君」

入れ替わりに仲本が入ってきた。尾崎の姿は無い。恐らく、生徒会の仕事があるのだろう。あの少年も、それを見越して今日ここに来たのかもしれない。

「なんか、色々知ってるみたいだね、さっきの」

「そうだな」

外で立ち聞きしていたのだろう仲本の言葉に、俺は短く答えた。本にあった丸い皺。濡れた跡。あれの正体。スポイトで水を垂らしたなんてわけはない。外にいて雨に降られたのでなければ、答えは一つ。

尾崎は、本を読みながら泣いていたのだ。

理不尽な噂。それを信じる同級生。偏見の目。それらに耐えて、尾崎は頑張っていた。できれば学校なんか、来なくなつただろう。この社会科学講義室は、その学校という差別の場で、尾崎が本来の自分でいられる唯一の場所だったのだ。

ふと、あの少年なら、尾崎を救えるかもしれないと思った。噂を知り、その真相を知り、本当の尾崎を知った彼なら。同じ1年生である彼なら。尾崎を積極的に助けることができるんじゃないか。

1週間後のことだった。尾崎が遠慮がちに俺に話しかけてきた。

「先輩、あの……この部屋のこともなんですけど」

「ああ、何だ？」

何の構えなしに聞いた。だから。

「来年度、別の所にしましょう、部室」

尾崎の言葉の意味を、しばらく理解できずにいた。

「……どうして……」

「もう俺は、大丈夫ですから」

尾崎ははにかむ。

「前々から思っではいたんです。このままでいいのかつて。でも、先輩が頑張っただ俺のためにこの部屋を守ってくれたのに、みすみす明け渡すなんて出来なくて……」

ハツとした。8月の榊との会話が思い出される。

生徒総会で、文芸部の仲間達は俺の味方をしてくれた。榊も言っていたじゃないか。友達にまで助力を頼んだと。そして、入船先輩がそれを先導していたということも。仮に俺が皆からの尊敬と信頼を集める人間だったとしても、そんなことができるだろうか？ それは予め俺が社会科講義室を死守するつもりであることを知っていたから起こせる行動だ。勝ち目が薄く、失敗すれば大きな問題になる。学校に慣れていない後輩ならともかく、先輩がそれに加担しようとするだろうか？ 俺がその気だったから？ それだけじゃあ理由には足りない。俺が何故そんなことをしているのかを知らなくてはならない。

そして、11月の榊の言葉。

『いつだってそうです。先輩は、何だって許してしまう。妙に優しく、変なところで生真面目で。尾崎君のことだって、入船先輩のことだって、今の私のことだって』

尾崎のこと？ 俺が、尾崎を許した？ いつ？

1つしかないじゃないか。尾崎のために俺が生徒総会で戦ったことだ。それを、榊は知っていた。俺の行動理由を、知っていたんだ。なら、同学年の尾崎がどうしてそのことを知らないと言える？ 尾崎もまた知っていたんだ。だからこそ、一層この部屋に固執せざるを得なかった。俺の努力を無駄にしまいと。

俺は尾崎を助けるつもりで、よりこの部屋に縛り付けてしまったのかもしれない。だったら……俺のしたことは、間違っていたのだろうか。

「何が、大丈夫なんだ」

俺はやつとのことと尋ねた。それに対して尾崎が悲しそうに笑ったと見たのは、俺の主観だっただろうか。

「先輩は、知ってますよね、俺に関する噂」

「……多分な。根も葉もないデタラメだろう」

「はい、出鱈目です。それどころか、現実とは真逆です」

「逆？」

「俺、父親とはもう何年も話してませんでした」

さらりと言われる。その意味を飲み込むのに、俺は少々時間を要した。

この学校の教頭である尾崎の父親。彼に対して、息子が無理を言っ
て自分の要求を通した。それは噂に過ぎなかった。しかし、実のところは家庭ですら一切の会話が無かったという。

俺は驚いた。が、考えてみれば推測の余地があったことでは無い
だろうか。

あの少年が気にしていたことだ。尾崎の持つてくる本は、皆親子
の幸せにまつわる話だった。尾崎はそれを読んで泣いていた。俺は
てつきり学校生活がづらいのだとばかり思っていたが、そうではな
かった。尾崎は追い込まれていたのだ。校内でも、家庭でも。

「でも、この前風見に——あ、クラスメートなんですけど——言わ
れましてね。もっと馬鹿になれって。なんかム力つきましたけど、
その通りにしました。その夜、父親とぶつかったんです。ほとんど
徹夜で、話をしました。そしたら本当に……解決しちゃったんです
よね。あっけないくらいに簡単に」

尾崎にどういう家庭の事情があったのかは分からない。俺に訊く
権利も無いだろう。でも、尾崎は幸せそうだった。心から笑ってい
た。だから、これでいいのだろう。

「だから、もう大丈夫です」

話が飛躍した。でも、俺にはその行間を汲み取ることができた。

尾崎は強いやつなのだ。それが今まで苦しんできたのは、学校と

家庭、双方に問題があったからに他ならない。家庭の問題が解決した今、尾崎には居場所がある。こんなちっぽけな場所じゃない、もっと完全無欠な拠り所が。尾崎を理解してくれる人が、いる。俺だけじゃない。仲本も、風見とかいう同級生も、何より両親がいる。尾崎は強いのだ。もう無敵なのだ。ちっぽけな噂なんぞ、屁でもないのだ。無視を決め込むこともできる。噂を吹き飛ばすこともできる。今となつては尾崎にとってそんなこと、簡単なことなのだ。だから、大丈夫なんだ。

夕闇の中、俺は外を見つめていた。尾崎は家族の用事があると言つて帰り、部室には俺と仲本だけが佇んでいた。

俺は、やつとのことでカズの真意に気づいた。

カズは俺に部室を手放させようとしていた。そのために、幾度と無く忠告してきたし、生徒総会では衝突した。俺は頑としてそれを拒否した。それが尾崎のためだと思ったから。

それを受けてカズは方針を転換した。俺が部室にこだわる理由を解消しようとした。だからあの少年を送り込み、同級生に真相を伝え、尾崎を救おうとしたのだ。見事な手腕だった。実際に尾崎は問題の半分に解決し、残る問題が消えるのも遠くないだろう。

そうだ。カズはハナっからうちの部室を奪おうとしていたのではない。尾崎を救おうとしていたのだ。

俺には無理だと思っていた。先輩である俺には、消極的な方法でしか尾崎を救うことはできないと思っていた。守りに徹することしか考えられなかった。カズはやってのけたのだ。間接的にはあるけれど、積極的に、尾崎の環境を変えることができた。対して俺はどうだ？ 結果を見れば、俺は尾崎のために何かしてあげられたのか？ 俺は何も分かっちゃいなかったのではないだろうか。逆に尾崎の首を絞めているだけだったのではないか。

「……俺は……間違っていたのかな」

誰ともなしにそう呟いた。傍らにいた仲本が、優しい声で応えた。

「間違ってない。正しいかは分からないけれど、間違ってなんかいないさ。いつだって、誰だって」

不意に涙が溢れた。泣くのなんて何年振りだっただろう。

その後幾日とせずに終業式を迎えた。クリスマスには、彼女に会わなかった。親の実家に帰省し、年末を過ごした。

俺は決心した。

彼女と、別れよう。

11・January(前書き)

8月3日、第1話を改稿しました。

設定も若干変わっていますので、随分前に読んだという方は確認してください。

11・January

「10ヶ月……」

彼女はそう呟いた。むこうを向いているので顔は見えないが、声の調子からすると今も表情は変わっていないのだろう。

「結構、長続きしましたね」

そうだろうか。こういうものの基準というものを知らないから、俺たちの付き合いが長かったのか短かったのか、俺には分からない。でも、もしかしたら大人になって俺たちは結婚するんじゃないかと僅かにでも思っていた俺は、夢を見すぎだったのだろうか。

冬休みが明けた翌週の土曜日、デートで訪れた公園で、俺は別れ話を切り出した。彼女は10ヶ月前に俺が告白したときと同じく、淡々と対応した。嫌な顔をすることもなく、泣くこともなく、怒ることもなく。ただただ、頷くだけだった。

「……理由は、訊かないのか？」

後ろめたさがあった。未練もあった。だから俺はそう尋ねた。もしかしたら、俺は彼女に怒ってほしかったのかもしれない。泣いてほしかったのかもしれない。感情を爆発させてほしかったのかもしれない。俺のわがままだってことは分かっているから。俺が悪いんだってことは分かっているから。

「大体、想像はつきますから」

彼女はいつもの声でそう答えた。俺の好きな、凜とした声。

「……悪いな」

そう言うしかなかった。

雪が、降り出していた。

放課後の社会科講義室。

携帯電話が鳴った。画面にはカズと表示されている。通話ボタンを押した途端、怒号が鳴り響いた。

「死ね！ 100万回死ね！ 豆腐の角に頭をぶつけて死ね！」

ハンスフリーかという音量に、近くにいた仲本がびくりと反応する。俺は溜息をつき、声が止むのを待つて携帯を耳に当てた。

「何だよ、いきなり」

「何だよじゃないでしょ！ あんた百合花チャンを振ったって本当！？ ふざけてんの！？」

一体どこからその情報を仕入れてきたのやら。

「ふざけてなんかいない。真面目に考えた末の結論だ」

「それがふざけてるって言うてんの！ あんた何様！？ 納得のいく説明をしなさい！」

「うるせーな。お前に説明する義理は無い」

「黙れボケカス！ 電話で駄目なら直接訊くからね！ ちょっと中庭まで来い！」

言いたいことを言うて電話は切れた。もう一度溜息。これで行かないと後々もつと厄介なことになりそうだ。俺は腰を上げる。

「すまん仲本、ちょっと用事が出来たから先に帰るわ。鍵閉めておいて」

しかし返事は聞こえてこない。不審に思って仲本のほうを向くと、なんとも奇妙な顔をしていた。

「……彼女さんと別れたの？」

ああ、聞こえてたよな。

「まあな」

「どうして……」

「別に。よくあることだろ、付き合う奴がいれば別れる奴もいるさ」仲本は俯く。こいつも何やら心配しているらしい。

「……私の、せい、かな」

「そんなわけないだろ」

「だって！ 私が……！」

口をつぐんでしまう。どうやら榊のことを言いたいらしい。確かに、それも理由の1つではある。でも、それは俺に事実を突きつけ

たに過ぎない。俺が彼女と分かれる理由は、もっと根本的なところにあった。

「おかしいよ……だって、榎本君、去年はもっと仲良さそうだったじゃない。一緒にお弁当食べて、土日どこそこにデートに行つてそんな話を、楽しそうにしてくれてたじゃない」

そうだっただろうか。どうも俺はのろけ話をしていたらしい。次回からは気をつけよう。

「考え直す気は……無いの？」

「どうして。俺はもう決めたんだ。結論は出た。納得してるよ」
「嘘！」

「どうして」

「だって……榎本君、すごい悲しそうな顔してる」

……そうだろうか？

彼女と別れる理由は、別に複雑な事情ではなかった。ただ単に、俺は彼女に相応しくないと思ったからだ。俺が彼女の彼氏でいる資格はない、そう判断した結果だった。

彼女は付き合ってからというもの、いや、出会ってから一度も、笑顔を見せてはくれなかった。

彼女はいつも言っていた。「楽しいです」。「嬉しいです」。でも、本当にそうだろうか？ 俺に気を使って、嘘をついていたのではなからうか。だって普通なら、楽しかったら、嬉しかったら、自然と笑みがこぼれるものじゃないのか？

俺はそのことに気づかない振りをしていた。無意識のうちに考えないようにしていた。俺は彼女を幸せにしてあげられているんだと自分に言い聞かせていた。榎の言葉は、そんな俺を現実に引き戻した。

榎は言っていた。彼女が笑っているのを見たことが無いと。俺が彼女を笑わせようと無理をしているように見えた。その通りだった。俺は無理をしていた。彼女の笑顔を自分の物にしたいくて交際を

申し込んだのに、彼女は一向に笑ってくれなくて。

彼女に笑ってもらおうと面白い話題を探した。おどけて見せた。冗談を言ったりもした。でも、客観的に見れば、それは明らかにおかしい光景だったのだ。俺ばかりが笑い、彼女は無表情でそれを聞き流す。そんな関係があつていいものだろうか。おかしいんだ。俺たちは変なんだ。だったら、何がおかしいんだ？

答えは分かりきっていた。俺が釣り合わないんだ。彼女を笑顔にできるだけの力が、俺には無かったんだ。

彼女を笑顔にしようという俺の目的は、達成されることはなかった。俺の力不足で。それでも、彼女は俺に尽くしてくれた。告白を受け入れてくれて、デートに誘ってくれて、弁当を作ってくれて、一緒に下校して。恋人としての役割を、十分に果たしてくれた。でも、俺はそれに応えることができなかったんだ。彼女を幸せにできなかったんだ。それどころか俺は彼女を利用してしまった。彼女は生徒会に干渉して、社会科学講義室を守ってくれたのに。俺と彼女と力を合わせて守った部室だったのに。それも無意味となった。社会科学講義室は尾崎の問題の解決と共にその必要性を失い、来年度は別の部活に使用されることになるだろう。全て無駄だった。彼女の努力は、すべからず報われることはなかったのだ。俺のせいで。俺のわがままに、彼女はずっと振り回されてきた。だから、もういいだろ。彼女を解放してやれよ。彼女を笑顔にできる、俺なんかよりもっといい男が、きつといるさ。あとはそいつに託そう。彼女の幸せを本当に願うなら。

「ふざけんな」

一蹴された。俺の数日にも及んで悩んだ拳句の苦渋の決断を、力ズは一言の下に付した。

「ああそうかい、それでえのっちは満足だろうよ。自己満足に浸っていればいい。美しい自己犠牲に耽溺していればいいさ。でもね、百合花ちゃんはどうなのさ。あんたの勝手な主張に振り回されて、

可哀想だと思わないの!？」

「思ってるさ。申し訳ないと思ってる。だからこそ、この状態を続けないために、さっさと別れることにしたんじゃないか」

「違う! あんたは何も分かっちゃいない!」

びしりと俺に人差し指を突きつける。カズの声が反響する。

「自分のことしか考えてない。百合花ちゃんがどう思つかなんて、全然考えてないでしょ! 百合花ちゃんがあんたのせいでどれだけ傷ついてると思ってるの!？」

「彼女の気持ちは分かってる。俺には彼女を幸せにはできなかった」「そんなことない! あんたは百合花ちゃんの気持ちなんてこれっぽっちも分かってないでしょ!」

「分かるさ! これでも1年近く付き合ってきたんだ! 彼女は一度も笑ってくれなかった。それが何よりの証拠だ」

「それは……百合花ちゃんが……ッ!」

珍しくカズが言葉につまる。その期を逃さず俺は話を終わらせにかかった。もうたくさんだ、何もかも。

「とにかく、俺は彼女と別れる。もう決めたことだ。今更撤回するつもりは無い。彼女も承諾した。第三者のお前が口を挟む余地は無い」

踵を返そうとしたその時。

「……ふざけんな……」

地獄から立ち上るような低い怒りに満ちた声。それがカズの声だと気づくのに、俺は数瞬を要した。

「ふざけんなよ! あんたに百合花ちゃんの何が分かるっていうんだ! 失望したよ! 前々から頼りがいの無い男だとは思っていたけど、それでも百合花ちゃんのことはちゃんと考えてくれていると思っていたのに! ここまでクズで腑抜けで鈍感で意気地なしで最低な人間だとは思わなかった! 何が彼女も承諾しただ! 百合花ちゃんはあるために身を引いたんだよ! そんなことも分からないっての!?! 調子に乗ってるんじゃないやねえよ! 私はね、あんた

なんかよりずっと百合花ちゃんのこと知ってるんだよ！ あんたに振られた日、百合花ちゃんね、私に電話かけてきたんだよ？ 電話の向こうで彼女、泣いてたよ。私言ったよね？ 百合花ちゃんのと泣かせたら許さないって。ふざけんじゃねえよ！ 男なら、付き合った彼女の一人くらい、幸せにしてみせろよ！」

怒鳴る。怒鳴る。怒鳴る。

何事かと校舎から窓を開けてこちらを覗くのが数名。だがカズは一向に気にする気配を見せない。感情をそのまま俺に向けて叩きつける。そんなカズを俺は見たことがなかった。

だが、待て。今カズは、おかしいことを言っではいなかったか？

「何で……彼女がお前の電話番号を知ってるんだ……？」

俺の認識では、彼女とカズの間に繋がりは無かったはずなのに。

「はあ！？ そんなの私が教えたに決まってるじゃない！ 何！？

あんた、私と百合花ちゃんは赤の他人だと思ってたわけ！？ だったら何で私があんたと百合花ちゃんが付き合い始めたことを知ってたのよ！ 百合花ちゃんが生徒会にいるってことを！ あんたが尾崎君のために部室を維持しようとしたことを！ 百合花ちゃんがあんたのために生徒総会で暗躍したことを！ どうして百合花ちゃんがあんたに振られたことを知ってるっていうのよ！ 傲慢も大概にしるよ！ 自分が知ってることが全てだと思ふな！ 私はね、あんたが百合花ちゃんに会う前から百合花ちゃんのこと知ってたんだから！」

突然明かされる事実には俺は面食らう。

確かに、考えてみれば分かることだった。あの塾には2つの中学の生徒が通っていた。彼女もカズも俺とは違う中学。ということは彼女とカズは同じ中学だということだ。そしてカズは中学の頃生徒会に所属していた。彼女も、今は生徒会に所属している。なら、中学の時もやっていた可能性は高いのではないか。その2人の間に絶対につながりが無いなんて、どうして言えようか。

でも、ということとは。

「お前は……俺と彼女が何をしたかって、逐一知ってたわけか」

「そうだよ。それが？」

「ふざけてんのはお前だろ！？」

俺も負けじと声を張り上げる。

「ああ、確かにお前は楽しいだろうよ！ 情報を集めて、人を動かすのが得意だっていうのは認めるよ。でもな、観察される側の気持ちを考えたことがあるか！？ 動かされる身になったことがあるか！？ はつきり言ってな、気持ち悪いんだよ！ 見透かされているような気がして、お前の掌で躍っているような気がして！ もううんざりだ！ 俺は俺だ！ 俺の行動は自分で決める！ これ以上俺に関わるなよ！」

そう言った瞬間、カズの顔から血の気が失せた。瞳孔が開く。俯く。へたりと座り込む。唇を震わせる。

「そんな……私は……」

先ほどとは打って変わった、今にも途切れそうな声だった。

「私はただ…… 2人に幸せになってももらいたかっただけなのに……」

その場を立ち去る俺の耳に、それだけが聞こえた。それが、いつまでもいつまでも、俺の耳から離れなかった。

彼女から電話がかかってきたのは、その翌週だった。曰く、2人で話がしたいという。

もう嫌だった。いい加減終わりにしたかった。俺は、これを最後にするつもりで、彼女と待ち合わせをした。場所は、俺が彼女に別れを切り出した、あの公園だった。

「カズと2人で相談するのは楽しかっただろうな。今度はどんな策を練ってきたんだ？」

出会い頭に俺は精一杯の嫌味を込めてそう言った。

彼女に嫌われたかった。俺のことを何とも思わないのであれば、せめて嫌いになって欲しかった。そうすれば今後こそ本当に別れられる。例えば後味が苦いものになるとしても。

でも、彼女は全く動じる素振りを見せなかった。いつものようにそれが酷く腹立たしい。

「吉沢先輩との間柄を隠していたのは、すみませんでした」

そう言って頭を下げる。そんなことは最早どうだっていいのに。

「でも、どうやら誤解があるようなので、言っておきたいことがあるんです」

「誤解？」

「はい」

俺との距離を1歩詰める。

「他のことは何とかわれても構いません。でも、これだけは――
一拍置いて。」

「私は、先輩のことが好きです」

「……情けは要らない」

「本当です。本当に、私は、先輩が、好きなんです！」

彼女はそう叫んだ。

叫んだのだ。

「……え？」

叫ぶとは、感情をむき出しにすることを意味する。今まで何の感情も表に出さなかった彼女が、声に感情を込めたのだ。驚いた俺が彼女の顔を見ると、何を思ったか彼女はくりと回って俺に背を向けた。

「何を言われても仕方ないと思います。私は先輩にそれだけのことをしてきました。でも、それでも！　これだけは本当です。私は、先輩が好きです！」

震える声で、精一杯の声で、彼女はそう言った。今までに聞いたことの無い、感情のこもった声。皮肉なものだ。それを聞きたくて付き合ったのに、別れるときになって初めて聞くとはな。

「別れたくない！　本当なら、別れたくないんです。私は、ずっと先輩と一緒にいたかった！」

「だったら、どうして――」

「先輩は、私のこと、嫌いですか？」

「そんなはずはない」

「だったら！」

彼女は叫ぶ。ありったけの感情を乗せて。必死さが伝わってくる。前から彼女はこういう人だったと錯覚しそうになる。

「だったら、何も問題は無いはずじゃないですか。このままで、いいじゃないですか！」

このままで、いい？

俺は彼女と付き合い続けていいのか？

甘美な誘惑に、俺は釣られてしまいそうになる。だが、寸でのところで踏みとどまる。違う。それは、彼女のためにならない。

「もういいよ」

優しく、俺は言った。

「もういい。俺を庇う必要なんか無い。本当のことを言ってほしい。君は……俺のことなんか、何とも思っちゃいないんだろ？」

「そんなことはありません！ 私、本気です！」

「だって！ 君は1度も笑ってくれなかったじゃないか！」

「……」

彼女は答えない。その背中から、俺は肩に手をかける。

「本当だというのなら、俺の顔を見て言ってくれ」

「……分かりました」

しかし彼女は振り向かない。その体勢のまま、10秒、20秒。

いい加減彼女の前に回り込もうと思ったとき、彼女はやっと振り向いた。

しかし、その顔に表情は無かった。

「好きです、先輩」

その声にも、感情は無かった。以前の彼女の、淡々とした、事務的な声だった。

「……ゲームセットだ」

俺は吐き捨てる。所詮は偽りだ。何のつもりか知らないが、彼女

は俺を騙そうとしている。

「先輩……」

「もうやめてくれ。これ以上続けると、本当に君を嫌いになってしまっそうだ」

……でも、その方がいいのかもしれない。

俺は彼女のことを好きだ。本当なら、ずっと付き合っていたい。でも、彼女は俺のことが好きじゃないんだ。ただ俺に付き合ってくれているだけだ。

それが一方的な好意に過ぎないのであれば。

そんなもの、いつそ無くなってしまった方がいいのかもしれない。

「さよならだ。君に出会えてよかった。楽しかったよ。ありがとう」
別れを告げる。今度こそ、終わりにしよう。

しかし背を向けて歩き出した俺の背中に、彼女はまたも言葉をぶつけた。

「楽しかった!」

感情をむき出しにした、あの声。

「信じてください! 私も、楽しかった!」
振り返ることは無かった。

どうしてだろう。

俺は納得して答えを出したはずなのに。

カズは俺と彼女に幸せになってほしかったと言った。

彼女は俺のことを好きだと言った。

どうして。

どうしてこんなにも惑わされるんだろう。

彼女らは一体俺をどうしたいのだろう。

分からなかった。

分からなかった。

本当に、分からない。

俺は、どうしたいんだろう。

ベッドに突っ伏していた俺の耳が、携帯の着信音を聞きつけた。
メールだった。仲本からだ。

そこには、たった一文、こう記してあった。

『彼女さんのことを信じてあげてください』

……

……

…… ははは。

どうしたらいいのか？

そんなこと、俺に分かるわけがない。

でも、どうしたい、だったら。

俺がどうしたいのかは。

もう分かっているはずだろう？

『Seeing is Believing』。

体験は、何にも勝る証拠となる。

でも、おれはその薄っぺらな情報に惑わされてはいないか？

彼女を信じたいんだろう？

だったら、信じてみるよ。

俺の表面上の経験よりも、彼女の言葉を信じてみるよ。

もとより、もう俺に失うものなんて無いんだから。

今までの記憶を呼び覚ます。授業で習ったことを、今までの経験を、そしてカズと彼女の言葉を。足りない情報を、パソコンで調べる。

そして俺は、1つの結論を得た。

彼女にメールを出す。

『来週の土曜日、この前と同じ場所で待つ』

彼女を信じるなら。

可能性は、これしかない。

12・February

「これから話すことは推測に過ぎない。だから、見当違いの可能性も大いにある。それでも――」

彼女の姿を見つけるなり、俺は口を開いていた。話しながら彼女との距離を詰める。

「それでも、君に確認したいことがあるんだ」

「物事を考えるにあたってまずしなければならないのは、何を考えるかを決めることだ。すなわち、問題提起だ。今回の問題は、俺の認識と君の証言が食い違っていることだ。俺は君が俺とのデートを楽しんでいない、無理をしていると認識していた。対して君は楽しかったと言った。その場合は、どちらかが間違っていると考えるのが普通だ。だから俺は、君が嘘を吐いていると判断した。これについては許してほしい。だって、自分の認識を信じられなくなったら、一体何を信じればいいんだ？」

でも、君は言ったな。信じてほしいと。だから俺は一度だけ信じてみることにした。君の証言を、信じることにした。しかしそうするとどうだろう。認識と証言の齟齬をどうやって解消すればいいのか。俺は考えた。

そのうちふと、この2つは必ずしも食い違っていないことに気づいた。君は楽しかったと言った。これは君の感情を直接表している。しかし、俺の認識はどうだろう。君の感情をどうやって判断したのか。すぐに気づいた。俺は君の笑顔を以って、感情の判断材料としていた。君が笑わなかったから、俺は楽しくないと認識したんだ。ならば、君が楽しくても笑わなければ、俺は君が楽しんでいると認識できなかった。それが認識と証言の齟齬なんじゃないか。でも、そんなことはありえるのだろうか。普通、楽しかったら笑うものじゃないのか。次の問題はそれだった。

ここで俺は、ある仮定をした。君は笑わないのではなく、笑えないんじゃないか。何らかの原因で笑うことができなくなっているんじゃないか、とね」

ここで俺は話を一旦区切って、彼女の様子を伺った。彼女の表情は変わらない。俺の考えが合っているのか間違っているのか、判断がつかない。俺は続けた。

「その場合、原因は2パターンに分けられる。精神的な原因が、身体的な原因かだ。精神的な原因とはつまりうつ病や何かのトラウマによって笑うことができないということだ。でも、この前君は感情を表に出した。それで判明した。君は、少なくとも声には感情を出そうと思えば出せるんだ。精神に問題があるならそんなことはできないと俺は思った。だから、それは否定された。

では、身体的な問題とは何か。繰り返し言うのと、俺は君が感情を表に出すのは経験した。でも、君が感情を表情として表現したことは見たことがないんだ。表情は、顔の筋肉によって作られる。そして筋肉を動かすには神経の指令が必要だ。すなわち、脳から顔の筋肉に至るまでのどこかに異常があれば、感情を表情としてアウトプットすることはできない。なら、そうなることはありえるのか。そうなるとしたらその病名は。俺は調べた。そして、見つけた」

再び彼女を見る。相変わらず、じっと俺を見つめたままだ。でも、ここまで異論を挟まないということはもしかすると。

「百合花さん」

俺は呼びかけた。結論を、突きつける。

「君は、顔面神経麻痺なんじゃないか？」

きみはがんめんしんけいまひなんじゃないか。

冗談のような言葉だった。まるで無表情な友人をからかって言うような台詞だった。

それでも、俺も彼女も笑わなかった。黙ってお互いを見つめていた。

「……本当に、あてずっぽうですね」

彼女が口を開く。俺は笑った。

「だから最初に言っただろう。ただの推測だ。それも、ずいぶん突飛な。呆れたか？」

「いえ、驚いてます」

十分な間を空けて、彼女は言った。

「その、通りです」

寒いですね、と彼女が言った。時候は2月。1年でもっとも気温の下がる時期。こんなときに公園にいる俺たちはどうかしていると思っただが、辺りに人がいない分都合がよかった。

「いくつか、補足することがあります」

ベンチに並んで座ると、彼女が口を開いた。

「先輩がその結論にたどり着けたのは、先輩が顔面神経麻痺についての詳細を知らなかったからです。もしもっと詳しく知っていたなら、先輩はその説をも否定していたでしょう。顔面神経麻痺は普通片側だけに起こります。そして普段の顔をしているときにも表情筋はある程度の筋緊張を保っています。だから、顔面神経麻痺になると顔の半分だけが筋収縮できなくなり、特徴的な顔貌を呈します。

また、顔面神経は目を閉じる眼輪筋や口を閉じる口輪筋も支配しているのです、完全に麻痺すると目を閉じたり物を食べたりといった日常動作も困難になります」

それを聞いて俺は困惑する。彼女の顔はどう見ても正常でむしろ美人だと思うし、彼女とは一緒にケーキや弁当を食べる機会が何度もあったにもかかわらず、俺が異常に気づくことはなかった。

「じゃあ、どういう……」

「程度がごく軽いんです。普段の表情を保つ程度には筋緊張を維持できて、日常生活にも支障をきたさないレベルの。でも、表情を作ると分かってしまうんです。私の顔がおかしいってことが」

彼女は淡々と話す。でも、もしかしたらそれはしたくてしている

のではないのかもしれない。本当はもつと感情豊かに喋りたいのかもしれない。

「発症したのはごく幼い時だそうです。私は物心ついたときには、私の表情が他人を不快にさせることに気づいていました。ほんの少し片方の口角が上がらない、目尻が下がらない、眉が寄らない。それでも、他人の目にはとても奇妙な顔に映るんです。だから、私はいつしか極力表情を変えないで生活するようになりました。

先輩はさつき神経が麻痺したから表情を変えられないんだと言いましたね。それは違います。動かすことはできるんです。ただ私は、感情と表情を意識的に乖離させることができるようになったんです。楽しいけど笑わない。悲しいけど泣かない。腹立たしいけど怒らない。そういう生活を、ずっと送ってきました。確かに冷たいと言われることもありましたが、でも、顔をからかわれたり気味悪がれたりするよりは、よっぽどマシでした」

彼女は何を思ったか俺を見やり、俺が気づいて視線を交わすと顔を背けた。

「先輩には言いませんでしたけど、実は私、以前に男の人と付き合ったことあるんです。2回ほど。

1回目は小学6年生のときでした。相手は隣のクラスの男子でした。初めての恋愛に私は舞い上がりました。でも、それも2ヶ月足らずで終わりを迎えました。振られたんです。いわく、私がいつも無表情だからつまらないと。2回目は中学2年の春でした。今度は3年の先輩で、知らない人でした。一目惚れだったそうです。

私はどうやら、パツと見は好印象をもたれる外見をしているようです。だから私のことをよく知らない人ほど、私のことを褒めてくれました。でも、それは所詮表面上です。そうやって近づいてきた人は皆、私が鉄仮面であることに気づくと去っていきました。たとえどんなに美しいものでも、興味を引かれるものでも、何も変わらなければ人はいずれ飽きます。美しい絵に描かれた人間よりも現実の人間を好む人が多いのは、それが変化するものだからだと私

は思います。表情も同じなんです。

だから今度は感情を示そうと思いました。表情にできないのならせめて声で表現しようと思いました。でも、今度はもっと短かった。1ヶ月くらいで私はその人に言われました。お前の顔は変だと。それで私は気づきました。やはり感情と表情は切り離せないものだ。楽しそうな声を出すには、楽しそうな表情をしなければいけないんです。そうなる私は駄目でした。楽しそうな声を出すために、奇妙な貌を晒すことになる。私はやめざるを得ませんでした。無感情な声に戻すほかありませんでした。程無くして私たちは別れました。そのときもまた、私が振られた形になりました。私は思い知りました。結局、私に人を楽しませることはできないのだと」

先月のことを思い出す。彼女が初めて感情をあらわにしたときのことを。そうだ。確かにあの時、彼女は顔を見せてはくれなかった。感情を出すためには顔を隠さねばならず、顔を見せるには感情を消さなければならぬ。それは何とも歯がゆいことだっただろう。

「先輩に出会ったのはそれからすぐのことでしたね。先輩はいい人でした。私が事務的な対応しかできなくても、気分を害する素振りは見せませんでした。1年半も私と一緒にして、それでも好きだと言ってくれました。だから告白されたとき、この人ならって思ったんです。」

実際、先輩は恋人として申し分なかった。いつも笑顔でいてくれた。いつも私を楽しませてくれた。私はいつしか、本当に先輩が好きになっていました。それが10ヶ月も続いたんです。本当に、幸せだった。」

彼女はずいぶん長続きしたと言っていた。出会ってから2年以上付き合ってから10ヶ月。それは確かに、彼女の経験からすれば長いものだったのだろう。

ようやく気づく。デートを提案するのは彼女からのほうが多かった。弁当も作ると言ってくれた。生徒会として俺を助けてくれた。彼女の雰囲気似合わないその積極性は、感情の代わりだったのだ。

表情で嬉しさを伝えられない分、それを積極的な行動で示そうとしていたのだ。

「だったら！」

俺は思わず口にしていた。

「だったら、どうして言ってくれなかった？ どうして君は感情を表に出せない病気だと俺に伝えてくれなかったんだ？ 言ってくれば俺は……」

君と別れようなどとは、思わなかったのに。

馬鹿馬鹿しい。言いながらも俺は気づいていた。分かりきったことじゃないか、そんなこと。彼女は顔を背ける。

「だって……それって、逃げじゃないですか」

それで俺はすべてを悟った。

彼女がそのことを俺に打ち明ければ、なるほど俺は納得するだろう。彼女の楽しいという言葉信じ、彼女につき合わせているのではと悩むこともなかっただろう。でも、同時に、彼女を哀れだと思わないだろうか。憐憫の眼差しを向けたりはしなかっただろうか。彼女を障害者だと認識した途端、俺たちの関係は彼氏と彼女という関係から障害者と介護者という関係に変わる。それは最早対等なものではない。

俺は恐れたはずだ。彼女が俺を好いてくれないことを。好意が一方的なものになることを。それと同じだ。一方が一方に与えるだけの関係を、彼女は是としなかった。対等な人間関係が崩れることは、彼女のプライドが許さなかったのだ。

「これで答え合わせは終わりです。納得してただけましたか？」

彼女は淡々とそう言った。でも、俺がそこに残酷さを感じることはもうなかった。

「……ああ」

「じゃあ、さよならです」

彼女は立ち上がった。

「待てよ！」

思わず呼び止める。が、続く言葉が見つからない。

「これでいいのか……？ この結末に君は満足しているのか？」

「満足はしていません。でも、納得するしかないんです。今まで本当に楽しかったです。ありがとうございました」

「そんな！ そんな、もう終わったことのような言い方をするなよ！」

俺は立ち上がった。彼女の背中に言葉をぶつける。

「終わってない！ 俺たちの関係はまだ！ もう別れる理由なんてないはずだろう！？ なのにどうして！」

分かりきったことだった。さっきも言ったじゃないか。俺は彼女のことを知ってしまった。知ってしまった以上、元の関係ではいられない。対等でない関係を続けていくよりは、他人になってしまったほうがいいと、彼女はそう言っているのだ。でも、だからといって！

「だって……君は苦しんでいるじゃないか！」

夏休みのあの日、カズは言っていた。彼女のことを守ってやれと。彼女は俺の無理な要求を通すために、生徒会の中で無理に動き回った。その結果として、彼女の人間関係に大きな影響を与えることはなかった。当時の俺はそう判断した。

でも、違うのだ。それは彼女が、俺以外の人の前では普通に笑っているという仮定の下の話だった。

表情は、人間の大切なコミュニケーションの手段だ。笑顔を形作れるのは人間だけだという話も聞く。だからこそ、それを持たない人間が受ける不利益は並大抵のものではない。笑顔を見せないだけで、人間関係でどれだけの損をするか。どれだけの誤解を生むか。俺はもう分かっているはずだ。ただでさえ彼女は不利だったというのに、俺はさらに無理をさせてしまった。先輩方の不興を買うようなことをさせてしまった。今彼女が生徒会でどのような状況にあるのか、彼女の証言を信用することはできない。その責任は、俺が取らなくてはいけないはずだ。

「もういいんです、先輩」

先月、俺が彼女に言ったように、彼女は俺に言う。

「先輩の優しさが嬉しかった。でも、それに甘えるわけにはいいんです。先輩に頼るわけにはいいかない。迷惑をかけ続けるわけにはいいかない」

「そんなことない！」

「……何に対して、ですか？」

「君は、俺を助けてくれた」

「生徒総会のことですか？ あんなの、全然大したことじゃないです。そんなことで——」

「それだけじゃない！」

苦いものがこみ上げる。思い出したくもなかった。でも、今言わなければならなかった。

「俺、中学のころ、不登校児だったんだ」

発端が何だったのか、よく憶えていない。でもどうせ、大したことではなかったのだろう。きっかけなんて、多くの場合えてして瑣末なものだ。そう、尾崎が教頭の息子だというだけで根も葉もない噂を流されたように。

1年生のときは何の問題もなかった。俺は楽しく中学生生活を送っていた。2年に上がってクラス替えがあっても、俺は良好な人間関係を築いた。そのはずだった。

2年の冬からだった。俺を取り巻く環境が一変したのは。

言葉や行為として表に出ることはなかった。でも、明らかな悪意が、そこにあった。遊びに誘われることがなくなった。一緒に弁当を食べる相手もいなくなった。そもそも話しかけられることすらなかった。

敢えて言うなら「無視」という名のいじめになるのだろう。学校での居場所を見失った俺は、次第に家にこもるようになった。俺は自信をなくした。己の価値が、存在意義が、分からなくなった。

一方で悔しくもあつた。奴らを見返してやりたいと思つた。俺は勉強だけは独学で続けていた。

しかし、1人で勉強をするにも限度があつた。見かねた両親が3年の夏休み、俺を塾の夏期講習に連れて行つた。家からさほど遠くない、同じ中学の生徒も大勢通う場所ではあつたけれど、知つてゐる奴はほとんどいなかった。人間関係がリセットされたその場所は、とても心地よかった。新しい友人も何人かできた。

共に学び、共に笑い。日常のどうもいい話題に花を咲かせ。現実なんてこんなもんさと知つたような口を利き。俺が俺であることを感じられた。俺の居場所を、ここに見つけたと思つた。

その中に、カズや彼女がいた。

「君である必要はなかつたなんて言わせない！　だって、現に俺は今、君のことが好きなんだから！」

初めて会つたとき、綺麗な子だと思つた。それがきつかけだつた。無表情なのが奥ゆかしかつた。笑顔を見たいと思つた。

そして何より、彼女は聡明で優しかつた。

彼女に出会えたことが嬉しかつた。

彼女と話ができるのが嬉しかつた。

彼女を好きになれたのが嬉しかつた。

彼女と付き合えるようになったのが嬉しかつた。

この世界にいられて良かったと思つた。

俺はこの世界を見捨てずに済んだ。

「一方通行なんかじゃない！　君が俺に頼るといふのなら、俺も君に頼る！　君が俺に迷惑をかけるというのなら、俺も君に迷惑をかける！　それでいいじゃないか！　お互い様だ！」

だから！　俺が君のことを好きであるのと同じように、君に俺を好きであつてほしい！　俺が君のことを想うのと同じくらい、君も俺のことを想つてほしい！　俺が幸せであるのと同じくらい、君にも幸せでいてほしい！　俺は、君が好きだ！」

後から彼女を抱きしめる。きつく、きつく抱きしめる。

震える声で、彼女が言った。

「……私も……先輩のことが、好き、です」

「俺も君のことが好きだ。お互い様だ」

彼女が振り返る。いつもの顔だった。今の俺には分かる。□こそ弧を描いてはいないが、これが彼女の笑顔なんだと。

しんと雪が降っていた。凍えそうな気温だったが、それを苦に感じることはなかった。

その中で。

俺たちは、初めて、キスをしたのだ。

12・February（後書き）

水を差すかもしれませんが一応注釈を。

今回出てきた顔面神経麻痺ですが、はっきりいつて架空の病気と思
ってもらったほうがいいかもしれません。

顔面神経麻痺という病気は確かにありますが、彼女のような状態に
なった例を自分は知りませんので。あくまで小説上の症状です。

13・epilogue

「やあやあ、えのっち、久しぶり！」

そう言つてカズが俺の肩を叩く。久しぶりと言われるほど久しぶりでもない。

今は生徒総会の始まる10分前。俺たち元部長と現部長が体育館脇に控えていた。生徒総会が始まれば俺たちは体育館の前に座り、生徒の質問を受けることになる。

尾崎を探すと、髪を茶色に染めた1年生——ここにいるということは彼も部長なのだろう——と談笑していた。尾崎は笑っていた。そこにもう、影を感じることはなかった。

尾崎が孤立していると知ったとき、俺は尾崎を助けたいと思った。中学の頃の俺のように自分の居場所を見失っているのなら、部室である社会科講義室をせめてもの居場所にしてやりたかった。俺が塾で彼女やカズに出会うことで居場所を見つけたように。

でも、それは逃げだったのかもしれない。

尾崎は最終的には部室に頼ることなく、学校に自分の居場所を取り戻した。俺にもできたのだろうかと思う。俺も、中学校から逃げたりせずに戦つていれば、自分の居場所を勝ち取れたのではないかと。まあ、既に終わったことだ。ああだこうだ言つても仕方ない。それに、おかげで彼女に出会えたと考えれば、これでよかったのだとも思える。

そんな思考を巡らせていると、今度はこめかみを叩かれた。

「おい、誰に見とれてるんだー？ 百合花ちゃんに言いつけるぞー」

カズもまた笑っていた。いつものカズだった。

「ばーか。その程度で俺たちの関係に影響は出ねーよ。俺と彼女の

絆は最強だからな」

「うわ、惚気か。むかつく。はいはいよかったねー、ラブラブだねー」

あれ以来、今度は逆に彼女を通してカズの話も聞くようになった。なんでも、俺たちが社会科学講義室を手放したことによって起こる部室の大移動に乗じて、園芸部を復活させようと企んでいるらしい。そういえばこいつ、1年のときは園芸部だったつけ。部員が足りなくて生物部に吸収されたけど。それがどうして生物部の部長をやることになったのやら。

まあ確かに第2生物室あたりは空きそうだな。部員さえいるなら復活も不可能ではないか。それにしても3年生になるというのに部活を立ち上げようとは。受験勉強は大丈夫なのか。まあ、こいつのことだ、何とかやってしまふのだろう。

そして俺と彼女。あれからまだ1週間だが、変わったことが3つほどあった。1つは先に上げたカズの話を書くようになったこと。

もう1つは冬でも昼と一緒に食べるようになったこと。実は購買の脇に自動販売機と一緒にテーブルがあり、ちょっとした休憩スペースがあった。今までは人の目が多いということで使わなかったが、もうこの際気にしないことにした。彼女と少しでも多くの時間を一緒に過ごすべきだという判断だった。彼女につらいことや悩み事があれば、少しでも俺という居場所で安らげればいい。そう思った。

そして最後の1つ。それは、彼女の感情が少しずつ分かってきたということだった。気づいてみれば実に彼女は雄弁だった。例えば嬉しいときは歩調が軽くなる。例えば緊張しているときは拳を握る。例えば慌てているときは視線が泳ぐ。彼女にそのことを伝えると、彼女は顔を赤くした。照れれば彼女も顔を赤くするのだった。それがまた、可愛かった。

俺は楽しかった。彼女もまた楽しいと言ってくれる。今の俺は、その言葉を信じることができる。

でも、ふと。俺はこの幸せな中で思うことがある。

確かに問題は解決した。何もかもうまくいった。でも、それは俺の功績なのだろうか。俺が成し遂げたからこそ今の今なのだろうか。そうじゃないんじゃないか。

この1年、俺は何かにつけてカズと対立した気がする。そして振り返ってみれば、いつも間違っているのは俺だった。カズは正しかった。そして俺は、カズに屈することは無かったはずだ。にもかかわらず、世界はいい方向へ進んでいる。それは何故なのか。

「お前は……何をどこまで分かっていたんだ？」

俺が尋ねると、カズは首を傾げた。

「唐突に随分と抽象的な質問をするね。何のことやら」

「俺はさ、何かお前の掌で踊っていたような気がしてならないんだ。俺が間違えた方向に進んだらお前がこっそりと直して、それで今があるような気がしてならない。今ある現実とは必然だったんじゃないかって、俺はマリオネットだったんじゃないかって、そう、思うんだ」

俺が間違ってもカズが正しい方向に導いていたのなら。俺が何をしてもたどり着く未来は同じだったのなら。俺の存在意義は何だ？

俺が俺である必要はあったのか？ 俺は、俺は――

「ばっかばかしい」

カズは笑ってそう言い捨てた。

「あのね、私は神様じゃないんだよ。だから、必然なんてものは操れない。確かに私は蓋然性をつなげて可能性を高めることはできるし、それが私の得意なことだという自負はある。でも、所詮は蓋然性なんだよ。必然性じゃないんだ。誰かが私に逆らおうという意志が少しでもあれば、簡単に崩れてしまうものなんだよ。だから、私のがえのつちを操っていたなんて考えは馬鹿げてるよ、被害妄想だね。それに、それにね、もし仮に尾崎君が救われたのが必然だったとしても、百合花ちゃんが救われたのが必然だったとしても、それを仕

向けたのが私だったとしても――」

俺を見据えて、にっと笑う。

「それは私の功罪にはならないよ。だって、直接手を下していないんだもの。実際に尾崎君を救ったのは風見だし、百合花ちゃんを救ったのはえのっちゃんだよ」

「随分と無責任な発言だな」

「ま、そうとも取れるね」

否定しないのかよ。

でも、そうだよな。

俺が俺である意味が無いのなら。俺が俺である必要が無いのなら。俺は俺でなくなってしまうだろうから。

体育館の扉が開いた。そろそろと俺たちが体育館に入っていく。用意された席に座る。見れば、ほとんどの生徒は既に並んでいる。一部の視線が俺たちに注がれる。まあ、ほかの奴らは……お喋りに興じている。そんなもんだ。

俺は隣にいる尾崎に小声で話しかけた。

「緊張してるか？」

「……はい」

「ま、気楽にいこう。俺がついてる」

「はい。お願いします」

了解。お願いされました。俺の最後の仕事だ。しまっていこう。まあ、どうせ大した質問は来ないだろうけどな。

彼女がマイクの前に立つ。だんだんと会場が静かになっていく。

「それではこれより、平成20年度丹木高校第2回生徒総会を行います――」

俺は、背筋を正した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5215i/>

ヒツゼンセイ

2011年9月22日03時31分発行